

日本常民文化研究所

日本常民文化研究所では、より広いテーマを取り上げ、より多くの人々の参加を求めて常民文化研究講座を毎年開催しています。常民文化研究講座は、古文書修復実習と民俗や民具に関する実習の講座を併設し、毎年定員を越える希望者を得て、好評を博しています。今年度の開催は下記のとおりとなりました。

第8回常民文化研究講座

「わざ・こころ・からだ 芸能の継承と現状」

(2004年11月13日、横浜キャンパス2号館地下演習室)

舞や謡や演技に型のある芸能として「能」と「京劇」を、型のない芸能として「奥三河の花祭り」と「中国江西省石郵村の傩舞」を取り上げ、それぞれの技術の習得に見出せる芸の伝承の本質についての報告がなされました。それぞれの発表をめぐって活発な意見交換が行われ、盛況のうちに終了しました。

- ・「能の演者の視点から 芸の伝承」/ 関根祥人(観世流能楽師)
- ・「京劇における女形の復活」/ 斬飛(日中伝統戯劇交流促進会会長、作家)・通訳 波多野真矢(立教大学講師)
- ・「奥三河花祭りの演者の視点から 芸能の継承」/ 伊藤勝文(花祭会館館長)
- ・「モーションキャプチャーを使つての演技の比較への取り組み 日本と中国」/ 長瀬一男(わらび座デジタルファクトリーチーフディレクター)・廣田律子(本研究所員)
- ・芸能の継承の特色と現状/ 後藤淑(昭和女子大学名誉教授)

古文書修復実習(11月14日・15日、横浜キャンパス3号館)

参加者たちは講師の説明に耳を傾けながら、古文書修復の基本的な工程を熱心に学んでいました。

講師: 田上繁(本研究所員) 関口博巨(鶴見大学) 白水智(中央学院大学)



ワークショップ

「たたら製鉄 砂鉄から鉄塊をつくる」(11月6日、横浜キャンパスグラウンド)

15人の参加者が2基の耐火レンガ製の炉をつくり、近代以前の製鉄法である「たたら製鉄」を体験しました。たたら1基につき、約2kgの鉄塊をつくることができました。

講師: 永田和弘(東京工業大学・冶金学)



第3回企画展

「鍛造の世界 鉄をきたえ意志をふきこむ」

(10月26日～12月21日、横浜キャンパス3号館1階常民参考室)

多くの過程を経て様々な種類の刃物へと形を変えていく、そんな鍛造の世界を取り扱ったユニークな企画・展示として、好評を博しました。

訪問研究員

海外提携機関より招聘する訪問研究員は、約2週間の滞在期間中、国内での調査活動に従事します。今年度は研究員約5名の招聘が決まり、うち3名がすでに訪問し、各々の指導教授のもと、研究課題にそつた調査活動を精力的に行いました。



写真左より、尹賢鎮(延世大学)、江静(浙江大学)、韓同春(北京師範大学)の各氏。



訪問研究員を囲んでの歓迎会を開催。(2004.12.7)

ホームページ

英語版ページをリニューアルしました。



<http://www.himoji.jp/english/>

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究 No.6

発行日 第6号 2004年12月31日発行

編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
Kanagawa University 21st Century COE Program
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661 Fax.045-491-0659 URL <http://www.himoji.jp>



巻頭言 3
永田 一清 (神奈川大学副学長)

対談 4

図像資料から見た江戸のマチ 4
竹内 誠×福田 アジオ

研究エッセイ **ESSAY**

特集：博物館資料は語る
博物館資料は誰のもの 10
中村 ひろ子
トランス・アトランティック物語 12
ヨーロッパ・コレクションのなかの古代メキシコ工芸
落合 一泰
博物館空間に広がる景観的世界 14
浜田 弘明
展示における昔を考える 16
青木 俊也

フィールドノート *Field Note*

ICOM2004年
ソウル世界博物館大会の参加報告 18
金 貞我
南洋群島に神社をたずねて 20
大坪 潤子

海外博物館事情 *Foreign Museums*

中国・国家主導の博物館事業 22
王 京
コラム 周期祭の背景 24
櫻村 賢二
コラム 獅子で付き合う、獅子で競う 広東の醒獅 25
彭 偉文
受贈資料一覧 26
主な研究活動 27
海外研究機関との提携 30
彙報 31
Report & Information 32

表紙写真説明



古代アステカのモザイク・マスク

イタリア・トスカーナ地方のフィレンツェを基盤に、14世紀ころからヨーロッパ中で銀行業や商業を営み、莫大な富を築いたメディチ家。各地の文物を収集していたメディチの手は、大西洋の向こうにまで伸びた。表紙写真は、古代アステカのモザイク面(16世紀初頭、ミシュテカ・プエブラ様式)。1533年のメディチ家目録に、「トルコ石を木に貼ったインディアのマスク」とある。スペインによるアステカ征服(1521年)の余燼くすぶるメキシコから、ヨーロッパに渡来したものであろう。大きく開いた蛇の口からアステカの火神シウコアトル「火の蛇」が顔を出している。古代アステカ文化を伝える貴重な非文字資料というだけでなく、ヨーロッパのアメリカ大陸認識史を考える手がかりにもなる。この面は、メディチ家が18世紀に断絶してのち、19世紀までフィレンツェ硬石作業所倉庫でたなざらしになっていたという。現在はローマの国立ルイジ・ピゴリーニ先史学民族誌学博物館蔵。(2003年2月19日 撮影・落合 一泰)

神奈川大学21世紀 COEプログラムに 寄せて

巻頭言



神奈川大学副学長
永田 一清

本学21世紀COEプログラム拠点「人類文化研究のための非文字資料の体系化」では、2004年2月に外部評価を実施した。外部評価委員として静岡大学八重樫純樹氏、国立歴史民俗博物館常光徹氏を委嘱した。この2名の評価委員が外部評価報告の筆頭に挙げたものは、「非文字資料とはなにか?」を分かりやすく説明する工夫が必要である、ということであった。確かにこの点が分かなければ、本学プログラムの目的は理解できない。

拠点認定後、1年を経た現在では見慣れたものになったプログラム研究構想図の「非文字」世界には、〔におい〕〔道具〕〔図像〕〔景観〕〔壁画〕〔絵画〕〔民具〕などの具体的な研究対象が挙げられている。これらは逆に説明の必要がないもののようにも思われる。

福田アジオ拠点リーダーの研究構想には「文字に表現されない人間の様々な行為、思考を資料化する方法は必ずしも開発されてこなかった」とあり、また、21世紀COEプログラム委員会(江崎玲於奈委員長)の本学プログラムに対する採択理由には、「非文字資料を体系化する普遍的な方法は未だ確立されておらず、きわめて独創的な試み」とある。これらの説明もまた理解不能ではない。

それでは従来の歴史学や民俗学の視点から見たときの難解さは何に由来するのか。

「非文字資料とはなにか?」という問いは、研究テーマの独創性と難解さへの問いなのではあるまいか。

つまり「非文字」「資料化」「体系化」これら説明の必要がないように思える言葉が「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というテーマに集約されたとき、それぞれの言葉の独創性と難解さが立ち現れてくるのだ。外部評価委員の指摘はこの意味で適切である。

本学が日本常民文化研究所を招聘したのは1982年である。また、この研究所を基礎に、1993年、特定の学部を持たない大学院の研究科として開設されたのが、歴史民俗資料学研究科である。非文字の世界を「資料」として注目・重視した渋沢敬三の姿勢は、日本常民文化研究所の研究成果や、それに基づく歴史民俗資料学研究科の深化・拡大された研究を経て、21世紀COEプログラムの採択へと継承・発展したともいえるだろう。

先ほど引用した採択理由に「非文字資料の収集・整理・体系化は、日本常民文化研究所とわが国唯一の歴史民俗資料学専攻大学院をもつ神奈川大学が拠点となるのが最もふさわしい」とある。「人類文化研究のための非文字資料の体系化」のプログラムは、神奈川大学のみが達成できるテーマなのである。最近〔嗅覚〕や〔味覚〕もCOEの研究課題として探求が始まったと聞いている。データベースの構築・公開のための体制強化や若手研究者育成プログラムなど、外部評価で指摘された解決すべき課題はあるが、未知の研究領域に分け入る独創的な研究成果を期待したい。



対談

竹内 誠

江戸東京博物館・館長

×

福田 アジオ

神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科・教授

図像資料から見た江戸のマチ

生活イメージの再構成 『熙代勝覧』の高い価値

福田 今日、江戸研究の中での図像資料・絵画資料の位置づけ、その成果についてお話を聞きたいと思います。

竹内 江戸研究の中で、都市景観論とか生活史や文化史が重視されるようになってから、絵画資料はいつそう重要性を増しています。文字資料からでは、なかなか立体的にイメージすることが出来ません。江戸研究上、絵画資料の代表は何といっても浮世絵ですが、絵画と文字の合体資料として従来いちばんよく利用されてきたのが『守貞漫稿』ではないでしょうか。本書の特に優れている点は、江戸と京・大坂との比較を図示・解説していることです。同じ便所の板扉でも、大坂の場合は下までであるが、江戸のは下の部分が風通しのよいように切っており、足が外から見えるようになっている。些細な生活史の一面面ですが、今村昌平監督の映画「ええじゃないか」を時代考証した際には役立った。

福田 『守貞漫稿』は三都の研究に欠かせませんね。

竹内 また、絵画資料ではありませんが、家の設計図作成に使用した大工さんの小道具が、江戸東京博物館に所蔵されています。薄い板で8畳の部屋、6畳の部屋とか廊下・便所・風呂場など各種の縮尺600分の1のパーツがたくさんあり、これを自由に並べ替えながら、これからつくろうとする家の設計図づくりをしたのです。江戸の職人のすごい知恵ですね。

福田 面白いですね。定規で描くのと違い、自由に組み替え、だんだん発想が豊かになっていく。

竹内 単純な小道具に見えても、建築の場合には、有用性がありますね。

福田 従来は、結果だけ見て立派な建物だとか、ここに工夫があるとか指摘してきたわけですが、建築のプロセスが考えられる。歴史研究も同じことだと思います。

竹内 最近発見された江戸に関する絵画資料の圧巻は、ベルリンの東洋美術館所蔵の『熙代勝覧』でしょう。江戸博開館10周年記念の企画展「大江戸八百八町展」の際、初公開されました。この絵巻は神田今川橋から日本橋までの江戸のメインストリートの賑わいと、西側に並ぶ90軒余の商店の繁昌するさまを俯瞰するように描いています。いってみれば日本橋繁昌絵巻です。これを仔細に見ると様々な発見がある。土蔵造りは、日本橋に近い方には多くて、離れるに従い少なくなる。三井越後屋はさすがに立派で、木綿店と呉服店両方とも他の家にはない雨樋がきちんと描かれている。家々の屋根の上に防火用天水桶があると従来は考えられてきたが無。物干し台みたいな物見台、火の目が所々の家の屋根に見える。そこに必ず、風の方向を知るための風見鶏がある。芝居小屋とか火災の危険性の高い建て物は、天水桶を屋根の上に置いたようですが、一般の家の天水桶は、下の道路の脇に描かれている。

福田 (図を見ながら) 確かにそうですね。

竹内 今川橋から本白銀町、本石町、十軒店、本町、駿河町、室町1~3丁目、品川町、そして日本橋へと克明に描かれており、町ごとに設けられた木戸の様子、木戸番

屋・自身番屋のあり方もはっきりわかる。

福田 今日なら写真などがありますが、当時、何を基礎データに描いたのでしょうか。スケッチはしたものでしょうか。

竹内 していますね。家並み順が正確で、文献資料とも符合するところが多い。和泉屋、須原屋といった本屋、玉寿司という寿司屋もきちんと描かれている。

福田 絵巻の中に、多くの人々が登場しています。

竹内 数えてみると1,700人位。店舗・魚河岸の賑わいは無論、立売り、棒手振りの商人から辻占、乞食の様子、親に手を引かれ嫌々ながら寺子屋入りする子。鍋釜持での引越の姿など江戸の貴重な風俗絵巻です。回向院の勧進僧の荷物に「文化二」と記されており、制作年代の参考になります。

福田 絵巻の制作意図は何ですか。

竹内 『熙代勝覧』という題名は、広く世の中が収まった時代の優れた景観という意味です。制作の意図は、この辺から推察できます。賑やかな町を簡単には見物できないかなり格の高い大名とか、一代の繁栄を豪商が描かせたとか、いくつか説があるようです。なお今回発見されたのは「天」の巻ですので、ほかに「地」の巻(さらには「人」の巻)があったはずですが、これらが発見されれば、江戸のマチの研究はより豊かなものになるでしょう。

福田 「地」の巻が発見されたら、どの辺が描かれていると思われますか。

竹内 「天」の巻の続きですから、日本橋より南の京橋・銀座へと描かれているとか、逆に今川橋から北へと描かれているとか、いや「天」の巻の反対側、つまり今川橋から日本橋までの東側の町並みが描かれているなど、さまざま推測されています。最後の場合ですと、オランダ商館長が江戸参府の際に定宿とした長崎屋と、そのすぐ裏手の時の鐘が描かれている楽しみがあります。

福田 「地」の巻の発見が待ち望まれますね。

竹内 絵画資料は非常に重要ですが、利用する際に十分資料吟味をする必要があります。かつて教科書にも載った江戸の町の中を行く、朝鮮通信使の行列の実景とした絵は、実は天下祭の際の練り物で朝鮮通信使一行を真似た仮装行列だったんです。駿河町の通りの場面で、両側

に棧敷をつかって緋毛氈を敷いて大勢の人が見物している。お祭り見物だったんですね。

福田 見る方は期待する面があるから、どうしてもその視点から見てしまう。

竹内 創作が加わり危ないのは寛永期の『江戸図屏風』、『江戸名所図屏風』です。『洛中洛外図屏風』と同じでね、実景とは限りませんからね。

『江戸図屏風』『江戸名所図屏風』の世界

竹内 家光の権威の顕彰が町方まで行き届いている『江戸図屏風』の秩序立った描き方に対し、『江戸名所図屏風』は江戸の町の喧騒と賑わいを活気あふれる形で描いています。二つの比較は面白い。

福田 城の中まで、俯瞰していますね。

竹内 『江戸図屏風』は江戸城の全貌を描き、朝鮮通信使の登場の場面とか、品川沖の軍艦の観閲式とか家光の威光を示しています。

鹿狩や鷹狩の場面でも日傘に入り顔を見せず、唯一ボロのような場面で家光は顔を出す。その多くは將軍の存在を明示せず暗示させる描き方です。もうひとつ、出光本の『江戸名所図屏風』では、町から見た江戸城しか描いていない。城内を描いたら、多分、処罰された。

福田 『江戸図屏風』の場合は江戸城を上から見ていますよね。

竹内 『江戸名所図屏風』の方は下から見ています。町方



『熙代勝覧』に描かれた町の賑わい
『江戸開府400年・開館10周年記念 大江戸八百八町展』
(江戸東京博物館 編集・発行)

対談

の立場で歓楽街・浮世風呂など江戸の喧騒が描かれている。一方の『江戸図屏風』は、城中の全機構が分かるような描き方です。めったやたらに誰にでもみせるものではなかった。魚河岸は両方とも描かれているとか、町並みの角屋敷には三階に銃眼が開けられ、狙撃できる櫓が描かれるなど共通項があります。建設途上の江戸の町の軍事都市的な側面がうかがえます。

福田 『江戸図屏風』の制作年代をめぐっては議論がありますね。

竹内 船印・船の形を根拠にする石井説が出されていますが、それよりも対照的な両者を比較検討し、寛永期の江戸社会を理解する絵画資料としての扱いが大事です。日本橋の高札場の場面で『江戸図屏風』の方は、人々が高札を見上げて読んでいるのに対し、『江戸名所図屏風』は誰も読んでない。二つの屏風の性格を象徴する場面だと思います。『熙代勝覧』にも日本橋の高札場が描かれているが、拡大すると高札の字が全部読める。

福田 米に字を書くようなものですね。ところで、図像資料から江戸の町の変遷は迎えますか？

竹内 図像資料も重要ですが、変遷といえば江戸考古学の発達に期待しています。東京の地層は、30cmほど掘ると東京大空襲、その下30cmが関東大震災、さらに掘ると安政の大地震、3メートル以下が明暦の大火の焼け跡です。一ツ橋高校遺跡の遺物からは近世の日常生活がわかる。煙管などは時代的変遷までわかります。

福田 図像の場合、同じ場所が経年的に描かれればよいのですが、そうはいきませんからね。

竹内 日本橋の町並みは享保頃だと、多分白壁が続いて



福田 アジオ
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授

いた。しかし、化政期頃には黒塗が流行り、幕末には黒壁の通りだった。

福田 柳田国男が白壁は関西のもので、東は緑だといっている。緑は壁ではなく、屋敷森。ただし農村部のことですが。

竹内 江戸の町は京を真似ていますから当初は関西風だった。同じ黒でも板壁か土壁までは分かりません。絵画から変化が追えれば、面白いですね。

福田 考古資料も最初は文字資料の追認であった。今は違い、文字資料に出てこないものが発掘で出てくることに意義がある。絵画資料でも同様なことがいえます。ところで、『江戸名所図会』のように大量に印刷された絵の価値はどうなのでしょう。

竹内 その価値は極めて高いですよ。安永9年(1780)刊の『都名所図会』を齋藤月岑の祖父幸雄が見て、『江戸名所図会』の編集を思い立ち、父の幸孝そして月岑の三代で作った。

福田 技法とか描く対象も似ていますが、地域差も認められる。記述も結構詳しいですね。

竹内 その通りで、江戸のガイドブックとか土産になった。挿絵を画いた長谷川雪旦は『江戸名所図会』だけではなく、芭蕉の奥の細道や信州を訪れ画筆を振っている。

“素人絵” 江戸の図像作者

福田 職業的絵師の描いた絵以外に旅日記などに素人の描いた絵が残されています。そうした絵心はどこで学んだのでしょうか。

竹内 狩野派の師匠は町の中に意外と多くいて、個人教授をしていた。

福田 稚拙だけれども、侍でも町人でも、文字で書けなければ、絵で描こうとした。渡辺華山だとプロに近い。

竹内 ここに持参したのは、尾張藩の家老、石河家の御家人の描いたものの写しです。石河権右衛門が領地巡検の折に描かせた『在所絵日記』です。弘化3年8月28日から9月15日まで総勢50人位の旅です。乾・坤と二冊で、文字は何々するところという注釈がある程度で、あとは全て絵で説明しています。登場人物全ての似顔絵が描いてある。自信がないのか、そこに名前が書き加えられている。御用人の石河権右衛門だけはまじめな顔で、あとはもう毎晩の宴会での乱痴気騒ぎのどうしようもない状況が描かれている。明らかに専門の絵師が描いてい

るとは思えない。

福田 今まではどうしても絵師の描いたものばかり注目してきた。

竹内 (図を示しながら)初めから終わりまで酒飲みのシーンの連続、あとは花火や相撲や豊年祭の獅子舞見物など遊びのシーンが多い。これが侍の旅のあり方ですかね。

福田 これは木曾川で河原遊びをしているのかな。あまり風景は上手くない、人物画の方が面白いですね。でも、よくまあ飽きもせず描きましたね。

竹内 よくまあ飽きもせず飲んでいる。(笑)

福田 この絵を誰が描いたかのサインはないですね。絵の素人が自身の経験とか観察に基づき描いた絵画を「素人絵」と名づけて分類すると、素人絵からは等身大の生活がわかる。今後、旅日記とか絵日記に記載された素人絵を絵画資料としてさらに発掘、研究する必要があります。

江戸の音・色・匂い 五感の社会史

竹内 江戸の物売りの声の録音版が市販されています。たとえば私が昭和10年代、子供の頃、毎朝聞いた行徳あたりから来る蜆売りの声と同じですが、江戸時代の売り声にまで遡れるかどうか。学問的根拠には疑問がある。定齋屋の売り声などもなつかしい。

福田 戦後、私が子供の頃に来た納豆売りの声などを覚えていました。定齋屋とは？

竹内 筆筒状の四角い箱を担ぎ、「えーじょさいやでござい」と暑気当たりの薬を売りにきた。わざわざ、日向を歩き効能を示した。物売りの声はいろいろ聞いていますが、近世以来続いてきたものかどうか。

福田 五感で歴史を捉えられるかですね。

竹内 物売りの声が朝昼晩違う。蜆売りは朝飯前に、金魚売りは夏の昼下がり、一日で音の違いがあった。四季折々でまた違う。鯉売りは威勢のいい若者が来る。ただ、音を具体的に聞かせると言われたら困る。

福田 文字で記録した音と、伝えられてきた音を照合することは可能でしょうか。

竹内 文献にあるからというのも危ない。江戸時代にはかぎ括弧はないから。(笑)

福田 匂いのもっとだめですね。言葉からはどんな臭さかわからない。

竹内 江戸東京博物館は体験型博物館で、纏をかざすとか、人力車に乗る、千両箱を持つなどの体験ができる。

対談



竹内 誠
江戸東京博物館・館長

江戸の資源リサイクル理解に必要と、臭い付きの肥桶担ぎを学芸員から提案された。肥桶は許可しましたが臭いは不許可です。(笑)

福田 そこまでいくと、本当に実感ですね。

竹内 今はやめたそうですが、宮城県東北歴史博物館では駄菓子屋さんに入ると甘いキャラメルの匂いが出るようにした。

福田 音もそうですが、匂いの問題は、展示の範囲内にとどまってくれないことですね。

琵琶湖博物館ではうんちの展示をしました。食べ物によって臭いも色も違うのだから、展示するならそこまで徹底しないと。(笑)

竹内 江戸の人々の色彩感覚もすごい。鼠色だけでも何種類もある。しかし、色は残るから近づきやすい。十八大通などの通人が好んだ色はぞろーとした黒です。粋な色というと、灰、茶、青の三系統。色や柄は時代によって流行がある。

福田 寛永期くらいまでの傾き者の好みはどんなものですか。

竹内 絵を見ると桃山風の大柄で粋じゃない。刀の鞘は、派手な朱塗りです。えらい派手な男が現れたと思われたでしょう。

福田 それが粋に転換するのは、いつ頃からですか。

竹内 18世紀後半、しかも江戸です。上方では、「すい」と言っただけで、^{かぶ}粋もいろいろ漢字で書きます。文学作品では、好風とか好雅と一字必ず好むを入れ、その横に「いき」とルビが振ってある。粋というのは相手に不快感を

対談

与えない。好ましい言動とか身なりとかが基本にある。福田 なるほど、自分が好むのではなく、他人に対して好ましい行い。

竹内 粹は、他人を前提とした美意識です。元禄時代ではなく田沼時代、18世紀後半、江戸文化が栄え始め、江戸っ子という意識の形成とも関係する。

福田 元禄期はどういう状況ですか。

竹内 前代の傾き者の延長線で伊達、気負いです。その代表が坂田藤十郎の世話物、和事に対する市川団十郎の荒事。一種の男伊達のスタイルを舞台上に形式化して出した。

福田 粹の文化の中、団十郎的なものは近世の後期になるとどうなるのですか。

竹内 それは伊達の系譜を引くのです。九鬼周造が定義した粹、つまり垢抜けして、張りのある、色っぽさのうちの洗練された「張り」です。

福田 垢抜けして粹になるわけですか。

竹内 正義感に燃えるような、張りだけでなく、他人を前提とする粹では、色っぽさが求められる。他人の多くは、異性ですが、男同士も女同士もあった。

博物館展示と文字・非文字資料

文字解説は必要か？

福田 博物館の展示と文字・非文字資料の関係について、館長の立場からの考えをお聞かせください。

竹内 歴史博物館ですから平物の文字資料が基本になりますが、立体的な展示を心掛けています。その折、歴史考古学資料の成果は有り難かった。絵・文字資料もある大名屋敷の展示に発掘資料が加わり、生活実態が復元できた。近世考古資料だけではなく、近代考古学の成果も、汐留や銀座から出土した実物を展示しています。

福田 銀座の煉瓦街などが実感できますね。近世文書の展示はどのように？

竹内 たとえば將軍・家茂の書簡や孝明天皇の宸翰はそれだけでも価値があります。しかし、展示意図の解説文と釈文と現代語訳は必要です。全訳は大変で、重要な箇所に矢印をつけ、線を施し訳すようにしています。

福田 関心を持ってもらう点でもひとつの方法ですね。先日、江戸東京博に行った時に、同行者にここの解説文は長すぎると言ったら、近づいてこられたボランティアの解説員はこれでも解説が少ないと言っていた。

竹内 解説板の字を大きくする指示を出したので、新しい解説板から字数は制限されています。題名だけ付けて、スポットを当てる考え方もあります。しかし芸術品とは違うから、きちんとした解説はした方がいいと思う。

福田 上野の東博も変わってきましたが、相変わらず基本は立ち止まって一点一点見る展示法です。江戸東京博

や佐倉の歴博は、ストーリーとして、全体を理解する展示を志向する中で、文字によらない方法があるのでは？

竹内 学芸員の研究成果、資料を分析したものを、グラフなどの形で、実物に添えて展示する。下手な解説より資料から何が言えるのかが分かる。常設展示では、文字でない分析データのパネル板が、実物とともに展示されているかないかで館の実力が分かります。

福田 結局、展示の解説は結論的なことを書いてしまう。それより資料から導き出される問題点や研究の手の内を学芸員が明らかにすることが大事だと思います。

竹内 実物だけ出しておけばと豪語する人がいますが、今の時代の博物館では不親切ですね。

福田 江戸東京博だと巨大な再現模型・実物模型があり、圧倒されます。

竹内 本来は、野外に濠を掘り、船を浮かべ、日本橋を架け、橋詰には高札場を立てる計画でした。橋詰に中村座を作り、照明は百目蠟燭で本格的な江戸歌舞伎を見せようと、団十郎さんにも許可を得た。それが屋内展示に変わり、30メートルの高さを埋めることになった。日本橋も江戸時代と同じ材料を使って実物大に復元しましたから、バーチャルリアリティで体験できる。

福田 歴博が歴史展示の方向性を作りましたが、江戸東京博はさらに地域を限定して特色を出した。近・現代展示も生きている感じがしますね。

竹内 残念ながらオリンピックで現代の展示を止めました。交通戦争とか隅田川の汚染などの展示表現が難しかった。

福田 その点、知事以下の固有名詞がないのはユニークです。地域限定のところで固有名詞をあげないのは勇気がいる。

竹内 江戸東京庶民の歴史ですから、固有名詞はほとんどない。誰を挙げて問題です。遠山の金さんを挙げると、大岡越前守をなぜ挙げないのかということになる。長谷川平蔵だっているじゃないかと。そこで固有名詞をなるべく使わないことにした。

時代考証のウソとマコト

福田 大岡といえば、「北町奉行所」の看板は実際はないわけですね。テレビドラマなどの時代考証をなさっていますが、時代考証の基準はありますか。

竹内 ストーリーについては創作ですからいじれません。佐久間象山、吉田松蔭、近藤勇がいつせいに黒船を遠眼鏡で見る、吉良上野介が大石蔵之助に茶会の招待状を送る、大石の切腹前に将軍綱吉が会うことなど史実としてありえませんが、テレビ番組では要求される。それなら、綱吉が水戸ご老公に扮して会いに行き、大石は一目見て悟る設定ならよいのかと。結局はストーリーを変えると大喧嘩になる。

福田 すごいことですね。(笑)

竹内 ただし、江戸時代の物事の基本的なあり方は絶対に譲れません。例えば、横に「松前屋」なんて書いて正面に掛ける看板はない。通りの構造から、横に出ていなければ看板にならないのです。「津軽藩下屋敷」などの看板もなかった。テロップでの説明を勤めても、テレビドラマはテロップを嫌います。

福田 テレビでは横の構図を欲しがらるでしょう。

竹内 居酒屋の机で向い合い、差しつ差されつる場面はおかしい。料理屋でも水茶屋でも、緋毛氈に横座りになり、銘々膳・箱膳やお盆が実際です。テーブルを利用して飲食するのは長崎の卓袱料理から、ちゃぶ台は大正時代からですね。

福田 時代劇の場面ではよく出てきますね。

竹内 横座りではテレビの絵にならない。苦肉の策で、机の真ん中に炉を切って鉄瓶を吊り下げ、囲炉裏風にし、斜向かいに座らせたりしました。お銚子ひとつの形にしてもその考証は難しい。棒手振りが天秤棒を置くときの紐の引っ掛け方とか、ずいぶん細かいところまで目を光らせました。

福田 折角、苦労して考証した事物でも、その後いつのまにか消えてしまうものもありますね。

竹内 それから言葉です。江戸時代にはない言葉はできるだけ使わないようにしました。「これから連絡を密にして」の「連絡」はない。「そういう責任がある」とか、「お前の義務だ」の、「責任」とか「義務」もない。言い替えが難しい。義務に対しては「責めを負う」という言い方を考え出した。「ミイラ取りがミイラになる」という台詞

(2004年11月17日 COE共同研究室、聞き手：佐野賢治 記録：関ひかる、中町泰子)

対談

があり、ありえないと思ったら、江戸時代の初めからある。『日葡辞書』に出ているのです。予想通り、放送後にクレームの電話がひっきりなしに鳴る、しかし、調べてあるので対応は万全です。それ以後、電話が鳴るような考証は、本当でもやめよう。(笑)

福田 それが無難というところですか。

竹内 江戸時代にある言葉を使うように随分喧しく言いました。脚本直しは、一番それが多かったですね。それともうひとつ、大石内蔵助が吉原通いの折り、土手八町に並んだ露店に二八蕎麦の看板があった。二八蕎麦は元禄以降ですので、すぐ消せました。おかしいのは、傘張り浪人が大晦日に、米屋などの支払いを済ませ、晴れ晴れとした気分、長屋の裏庭に出て空を見上げると雲の間から満月、というよくある場面。演出家にすれば、「ああ良かった」などと語らせないで、浪人の心象風景を表したい。江戸時代は旧暦だから晦日に月が出ているのはおかしいと指摘すると、その光景を残念そうに取り止めます。私も、それはすごく辛いことです、やりたいところだから。(笑)

歴史研究における非文字資料の価値と可能性

福田 このプロジェクトに対するご意見をお聞かせください。

竹内 歴史研究上の問題として、文字資料だけでは限界があると思います。幕藩体制の仕組みとか粹組みを問題にしている分には差支えないのですが、たとえば、江戸城内の儀礼を扱う場合、文字資料では立体化とか形象化ができません。將軍にお目見えするとき、城内の廊下をどのような順路で進み、広間では畳のどの位置に座るのがか絵図では点や線で示されています。將軍権威の家来に対する序列化の実態が具体的に分かるわけです。文字資料からだけでは制度面と実態をつなぐことはできない。所謂絵画的な非文字資料の存在は知ってはいても、分析はしてこなかったし、問題意識もなかったから、積極的に利用はしてこなかった。絵画資料をはじめ非文字資料を利用した歴史研究はそのとば口があり、可能性は非常に開かれていると思っています。

福田 大変勇気づけられる結論をいただき有難うございました。

博物館資料は誰のもの

中村 ひろ子 (COE特任教授)



1 資料と情報は市民の共有財産

平塚市博物館をたずねる必要があつて開いたホームページ上でこの「資料と情報は市民の共有財産」というメッセージに出会った。「展示を作ったり本を刊行するためには、その裏側に膨大な資料と情報が蓄積されていますが、それらは市民の共有財産ということができます」と続く。情報が共有財産という理解は情報公開の進むなか市民権を得ているといえようが、実物資料についてのこのような明確なメッセージには博物館のなかでも博物館学の書物のなかでも出会うことは少ない。それはこれまで博物館資料については分類整理保存の方法や技術について語られることが多く、博物館資料そのものについてのきちんとした議論が蓄積されてこなかったからであるが、ここ数年やっと博物館資料をめぐる論議がみられるようになった。その動向の紹介を兼ねて博物館資料について少し考えてみたい。

2 博物館評価の中の資料

いうまでもなく博物館が他の機関と異なるのは「資料の収集・保存と展示」にある。それは博物館のすべての活動の基本に資料があるということであるが、近年の博物館の存在意義の問い直しや評価といった中に、この博物館の基本である資料についての評価を見出すことは難しい。

例えば、川崎市民ミュージアムの行政評価(「平成15年度包括外部監査の結果及び意見の要約」)で指標とされたのは「入場者数・入場料・職員数・職員1人当り入場者数・展示室床面積100m²当り入場者数・職員1人当り入場料」であり博物館資料は指標として登場することなく「民間企業に例えれば倒産」と評価された。

と同時に、応募した市民により組織された川崎市民ミュージアム市民委員会議が博物館への期待を込めてまとめた「改革への提言」(平成16年3月)にも資料についての言及はみられない。利用者である市民の博物館資料への関心や期待も低いのである。ただ、川崎を例に取り上げ

たのは評価を受けて学芸員側が作成した「改善実施プラン」(平成15年7月)の中で「職員1人当り入場者数」に代えて「職員1人当り資料管理点数」を指標として提示した、すなわち評価への抵抗のよりどころに資料を選んだところに学芸員の戦略と思いがみえたように思えたからである。

川崎市に限らない。博物館資料が行政評価の指標とされることはほとんどない。あらためて博物館資料に対する社会的認知の低さに気付かされるが、それはまた今まで「博物館ではなぜ資料を収集するのか」を、そして「収集された資料は市民の共有財産」なのだということをきちんと伝えることを怠ってきたのではないが、利用者が博物館資料と出会い、その大切さに気付く機会を増す努力をしてこなかったのではないかとこの思いに至ることもあろう。

3 博物館資料と出会う

利用者は博物館資料とどのようにして出会うのだろうか。まず展示室で実物資料(一次資料)に出会う。実物資料のもつ情報から作成されるレプリカ、模型、写真、図、映像といった資料(二次資料)に出会うことも多い。もう一つが情報コーナーなどと名付けられた情報機器を通して出会うデジタル化された情報である。所蔵資料をデジタル化し、館外からのアクセスも可能ということも徐々に増えつつあるが、まだ所蔵資料の一部であり、その全体像を知る機会是一般の利用者にとっては少ない。特に実物資料に出会うのは展示室のみといってもよからう。多くの資料は収蔵庫にしまわれているからである。規定を設けて研究者などには許可しているものの、一般の利用者には保存管理を理由に閉ざしているというのが現状である。

図書館を考えてみよう。利用者は書棚のものは自由勝手に、書庫の中のものでも請求書1枚で利用することができる。図書は市民の共有物であり、一部の保存すべき書物を除けば市民に利用されるために収蔵されている。勿論、図書の多くは実物資料であると同時に複数存在する複製資料、博物館でいえば二次資料に近い存在であり、

博物館資料、特に実物資料と同一に論じることはできないが、同じ共有財産として博物館資料を利用する機会を今より拡大する方法が考えられるべきではなかろうか。

4 収蔵庫を開く

この「博物館資料は共有財産」という認識のもとに資料の利用を考える先には収蔵庫の公開という問題がみえてこよう。しかし、保存というもう一つの博物館の重要な役割と競合する問題であり、「情報公開法」にあっても第2条2項の「次に掲げるものを除く」として「政令で定める公文書館その他の機関において政令で定めるところにより、歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料として特別の管理がされているもの」と除外できる規定になっている。

「収蔵庫こそはその博物館における資料収集、調査・研究および展示・教育というあらゆる活動の成果が結集され、蓄積されている場所」であり「それを公開することは、むしろ博物館の義務である」(後藤和民 1979)との論も提示されている。ここで公開の対象として想定されているのは博物館外の研究者であるが、今問われているのは一般の利用者に向けてであり、それを可能にする保存との両立を可能にするためのシステムづくりや技術の問題であろう。すでにその実務モデルが提示されてもいるのである(佐々木秀彦 2004)。

5 共有財産としての博物館資料

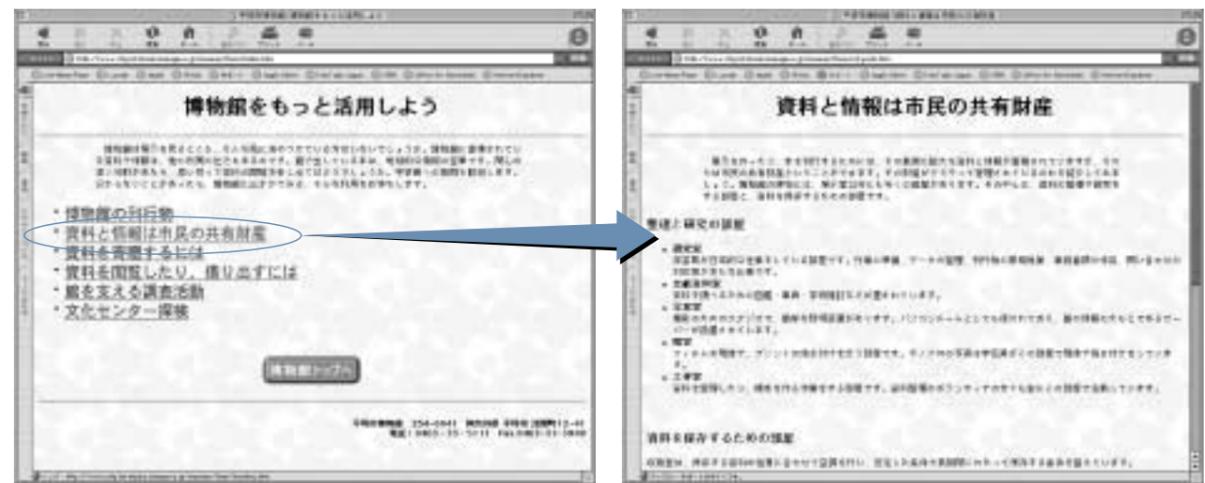
博物館資料が市民の共有財産であると明記されたもの

はない。博物館法でも第2条に博物館の目的を達成するために「博物館資料を豊富に収集し、保管し、展示する」と記されているだけである。しかし、博物館に限らず行政の仕事が市民から託されたものとすれば、学芸員もまた資料の収集、保存、展示などを市民から託されて行ない、公費での購入や市民からの寄贈などによって収集された資料は市民の共有財産であることは自明ということになる。私立の博物館についてもICOM(国際博物館会議)の定めた「職業倫理規定」が示している「公立機関であれ、私立機関であれ、博物館に雇用されることは大きな責任を伴う公的委任」という規定を尊重したい。公立私立の区別なく、すなわち公費によるかどうかではなく、博物館のもつ社会性に照らして「公的委任」であるとしているのであり、その資料については社会に対し責任を持つべきことがうたわれている。

博物館の存在意義を自ら明らかにすることが求められている今、博物館が市民から託された資料という共有財産を責任をもって保存し、活用する場であるとの再確認が欠かせない。情報だけでなく収蔵庫の実物資料を含めた公開が求められているのだといえよう。前にもまして保存と活用の両立についての論議が必要となる。

参考文献

- 後藤和民「歴史博物館」1979
(「博物館学講座6 資料の整理と保存 雄山閣」)
- 布谷知夫「博物館資料としての情報」2002
(「博物館学研究」27-1)
- 佐々木秀彦「公共財としての博物館資料(上)(下)2002・2004
(「博物館学研究」27-1・29-2)



平塚市博物館ホームページ (<http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/museum/>) より

トランス・アトランティック物語

ヨーロッパ・コレクションのなかの古代メキシコ工芸



落合 一泰 (COE共同研究員 / 一橋大学大学院・教授)

1 珍品奇物陳列室

「紳士たるものは、」と16～17世紀のイギリスの哲学者フランシス・ベーコンは次の4条件を挙げた。第一に完璧な蔵書を備えること。第二に素晴らしい庭園を造ること。第三に珍しい天然物・人工物を集めた展示棚をもつこと。そして、第四に心地よい静かな家に住み 賢者の石 をもつこと。『ハリー・ポッター』ブーム以来、四番目に話題性があるかもしれないが、当時はどの条件も大切であり、じっさい、すべてを満たそうとする人が大勢いた。

16世紀以来、ヨーロッパの王侯貴族のあいだでは珍品奇物コレクションを備えることが流行した。全世界から天然物(ナトゥラリア)や人工物(アルテファクタ)を集め、邸宅の一隅に飾りたいと願ったのである。いわば世界のエッセンスを家に備えるのだから、その社会的 presteege も高かった。近代博物館の起源は、この種の珍品奇物陳列室(ヴンダーカンマー [驚異の部屋])にあるといわれる。この趣味は次第に富裕市民層にも広まった。ベーコンの挙げた第三条件とは、このブームのイギリス版である。

この種のコレクションでは、アステカ工芸など古代メキシコ文明の遺物が珍重された。古代メキシコといえば、ピラミッドや石碑が名高い。しかし、人々は多くの工芸分野で旺盛な創造力を発揮し、独特の美をたたえた完成度の高い製品を生み出していた。絵文書、武具、金銀や貴石や羽毛の細工、織物、木工、土器など、枚挙にいとまがないほどである。16世紀初頭の征服以来、おびただしい数のそうした工芸品が戦利品ないし献上品として大西洋を越え、ヨーロッパのコレクションに加わっていった。

2 ヨーロッパ人の見たアステカ工芸

メキシコの工芸品は、大航海時代のヨーロッパ人の目に、どのように映っていたのだろうか。スペイン国王カルロス一世(神聖ローマ皇帝カール五世)は、手に入れた工芸品を国内のみならず支配地ブリュッセルなどでも誇示してみせた。それに強い印象を受けたひとり、画

家アルブレヒト・デューラーである。1520年8月にブリュッセルでこの宝物を目にしたデューラーは、日記にこう書いている。

「私は新たな黄金の国から王に捧げられた品々を見た。それらは幅が両腕を広げたほどもある全部黄金の太陽、おなじ大きさの純銀製の月、その土地の人々の鎧二部屋分、あらゆる種類の驚くべき武器、武具や投げ矢、じつに不思議な衣服、寝具など人間が用いる素晴らしい品々であり、すべてが驚きを飛び越えていた。貴重なものばかりで、何万フロリンもの値がつけられていた。私の心がこれほど魅了されたことは、かつてなかった。というのも、それらが並外れて芸術的な作品だったからである。私は遠い土地の人々の神秘的才に驚愕した。それらを前にして心に浮かんだことを言葉にするなど、私には到底できない」。

デューラーは金細工職人の息子だったから、アステカ人の巧みな手工芸に心を大いに動かされたのだろう。画家デューラーのこと、さっそくスケッチしたにちがいない。だが惜しいことには、今日その断片すら残っていない。それでもデューラーは、この一文だけで、金銭的な価値を超えたアステカ工芸の完成度に感嘆した様子を描ききっている。

イタリア出身の歴史家・地理学者ピエトロ・マルティエーレ・ダンギエラも、1519年にセビリアに陸揚げされたアステカ工芸品、とくに羽毛工芸に息を呑んだひとりである。

「私がすばらしいと思う黄金や貴石でさえ、羽毛細工職人の才覚や技能にくらべたら、その足元にも及ばない。その技芸は素材の価値を大きく上まわっており、私をいたく驚かせた。私は一千点もの細工を吟味したが、それをどう表現したらいいのか分からない。美で人間の目をこれほど楽しませるものを、私はこれまで見たことがない」。

マルティエーレはトルコ石のモザイクを施したマスクにも目を丸くしている。

「私たちは素晴らしく手の込んだ面にも驚かされた。本

体は木製で、石で覆われている。石は熟練の手わざで完全につなぎ合わされているので、継ぎ目を爪で探り当てることさえ不可能だった。肉眼には、まるで一個の石のように見えるのだ」。

3 個人コレクションから博物館へ

アメリカ渡りのこれらの工芸品は、ヨーロッパの宮廷のあいだで取引され、交換され、また婚礼の持参金の一部として贈呈されていった。しかし、長く大切にされたかといえば、そうとは限らなかった。コレクターが見飽きてしまうと金銀は鋳つぶされた。上質の羽毛工芸からは、貴族の帽子や馬のたてがみを飾るため、美しい羽根が一本また一本と抜き取られていった。トルコ石を象嵌したモザイク面からは高価な石だけえぐり取られ、ときにはすりつぶされて絵の具の材料に使われた。

そうした人為的な破壊よりさらに強力なシュレッダーがあった。忘却と無関心である。異国の珍品も、当初の好奇心が薄れると人手に渡り、部屋の一隅で埃まみれになった。そして人知れずゴミとして捨てられ、記録からも姿を消していったのである。

だが、ごく少数ではあるが、そうした破壊や散逸をまぬかれた古代アメリカ工芸品が、ヨーロッパの博物館や個人コレクションなどに残されている。

ウィーン民族学博物館にある、ケツァル鳥の長い尾羽をふんだんに使った深緑の羽毛の頭飾りの場合、メキシコから大西洋に船出してヨーロッパに渡り、イタリアかネーデルランドのコレクションに収められたあと、南ドイツのコレクターの手に渡り、その後チロル山間のハプスブルク家コレクションに加わった。そして、長く忘れ去られていたところを再発見され、19世紀にウィーンへ。アステカの羽毛の頭飾りは、世界にこれ一点しか現存しない。

ロンドン・大英博物館で異彩を放つ人間の頭蓋骨。トルコ石のモザイクがその表面を隙間なく覆っている。他にほとんど類例を見ないアステカ工芸だが、ベルギーのコレクションに収められるまでの経緯は不明である。それが19世紀に競売にかけられたとき英国人が買い、のちに大英博物館に遺贈された。

1519年、アステカ王は、征服者コルテスにお引取りを願ってたくさんの贈り物をした。それがわずかながら残っている。たとえばモザイク・マスクやナイフの柄の一部は、16世紀にはポロニャやフィレンツェのコレクションにあった。しかし、その価値は時間とともに忘れ去られ、19世紀後半に首都ローマの博物館に譲渡されて現

在に至っている(表紙写真参照)。移管されたときの状態はひどかったらしい。

ところで、上述のウィーンの頭飾りを含め世界に6点しか残っていないアステカ羽毛工芸のひとつが、メキシコ国立歴史博物館にある。羽毛の盾なのだが、アステカ時代からずっとメキシコで保管されてきたのではない。1864年、ナポレオン三世のさしがねでハプスブルク家マクシミリアン大公がメキシコ皇帝に即位したさい、オーストリアの実家のお蔵から取り出してメキシコ国民への土産として持参したのである。盾にしてみれば、ヨーロッパに渡って300年あまり後の里帰りだった。

4 時空を旅する工芸品

16～17世紀にヨーロッパに渡ったこれらの品々は、生まれた土地や時代から切り離された、特異な工芸品である。作られた場所の文脈に戻して語りたくても、分からないことが多すぎる。貴重で類を見ない美術工芸品であるため、研究者といえども手にとって検討することはまず許されない。正確な出自が不明なうえ、似たものが発掘されることもないため、考古学者はこれをどう扱っていいのか思いあぐねてきた。

しかし、出生証明書だけがその工芸品の価値を決めるわけではあるまい。生まれ故郷から切り離されてヨーロッパに渡り、人々の耳目を集め、そして忘れ去られていった履歴そのものも、その工芸品の生きた価値だと思う。これら 旅する工芸品 を特別視せず、その足取りを素朴にたどってみたい。散逸してしまった工芸品は、路傍の骨となった旅人であろう。ならば、その生前の姿を少しでも明らかにしておきたい。そうした研究から、古代メキシコ工芸品を媒介としたトランス・アトランティックな文化関係史が浮かび上がってくるのではないか。

コレクションや博物館は、モノをその本来の文脈から逸脱させることで成立する。もとの脈絡で生きたなら、モノは腐ったり壊れたり灰になったりして、自然に寿命を終えてしまうからである。16～17世紀ヨーロッパのコレクションでは目録作りが重視されたが、それでも散逸や腐朽がしばしば起きた。しかし、徹底した管理技術と保存科学の発達とともに、博物館の収蔵品には寿命がなくなった。死ななくなったのである。古代メキシコ工芸品は、生まれた時代や場所から遠く離れた展示ケースや収蔵庫のなかで時間を超えていく。それは、トランス・アトランティックな旅とはまた別の、果てしない旅のようにも思われる。

博物館空間に広がる景観的世界

浜田 弘明 (COE教員 / 桜美林大学・助教授)



私は現在、博物館学芸員の養成と文化地理学を教えることなどを主な仕事とし、本学大学院歴史民俗資料学研究所においても、今年度からスタートした博物館資料学コースの1科目を担当させて頂いている。しかし、一昨年春までは、準備担当を含め20年ほどの間、神奈川県にある相模原市立博物館において「人文地理」担当の学芸員として、博物館の現場に勤務していた。

博物館学芸員の人文分野という、収集資料と密接にかかわってくることから、考古・歴史・民俗・美術史などが一般的なところであろう。博物館において、地理学出身で歴史や民俗、地質を担当している学芸員は何名か知っているが、「地理」そのものを学芸員の分野として位置付けている博物館は極めて稀のようである。私自身も神戸市立博物館の「歴史地理」や、埼玉県立川の博物館の「自然地理」以外には、あまり耳にしたことがない。

確かに地理資料というと、一般には地図程度しかイメージされないのではなかろうか。もちろん「人文地理」担当学芸員として、絵図・地形図・主題図をはじめとする各種の地図類、空中写真などの収集に力を入れ、景観の記録にも努めてきたが、それ以外にも集めるべき資料は多数あった。実際には、歴史資料でも民俗資料でもなさそうではあるが、地域にとって大切と思われる資料は多数あり、それらは人文地理担当である私が集め、調べるといった役割を果たしていた。とくに地域の都市化にかかわる問題は、地理学研究の一つの課題であり、一例をあげれば、戦後の急速な都市化や生活変化にかかわる資料、中でも高度経済成長期以降の生活用具（家電製品・量産品など）や印刷物（パンフレット・チラシ類など）などは、私が担当してきた資料の典型と言えるかもしれない。これらは、全国どこで集めても同じではないかとの批判もあるが、実はどこにも残されていなかったというものも少なくなく、また、一見地域性がなさそうなものにも地域性があつたりする。必ずしも、これらの資料や課題を地理学分野が担当すべきとは言わないが、少なくとも、地域の都市化や変貌を考える上で、地理学的発想

は有効と考えられる。

相模原市のような近郊都市において、戦後の都市化にかかわる諸問題は、地域の歴史を語る上で、また博物館展示の上で大きなテーマとなり得る。相模原市立博物館では、常設展示の中で「地域の変貌」というテーマを設けている。この展示コーナーは、大正期以降、平成期に至る地域の景観変化と、それとともに移り変わった人々の暮らしを主な内容としている。もちろんここには、準備段階に調査し収集した、家電製品や印刷物も資料として展示しているが、こうした実物資料のほかに、映像や模型も多用している。地域の「景観」と「土地利用」の変化については、4面の100インチのマルチビジョンで見せるとともに、縮尺500分の1の景観模型を10点製作し展示している。「地域の変貌」を視覚的に理解しようとする時、身近な「景観」の変化を目にすることは、一般市民にとって最もわかりやすい方法の一つであると考えられる。

博物館において、「景観」や「環境」にかかわる展示をよく見かける。航空写真をパネル化して展示しているだけのところもあるが、街の姿を縮尺模型にしたもの、遠近法を用いてパノラマ展示としたもの、ある場所を実物大に再現してジオラマにしたものなど、立体的に見せようとする様々な手法が取られている。このような、自分が知っている場所が立体的に再現された資料は、博物館では意外と人気のある展示の一つとなっている。

ある事象を図で説明しようとする、それを読むという少し特別な技術が必要とされることから、展示としては市民に敬遠されがちである。写真や模型についても、そうした「読む」技術が必要ではあるが、図に比べ、「見る」だけで雰囲気的に読み取れるものもあり、見る側にある種の気楽さがあるようである。展示の側としては、「読ませる」ための資料ではなく、「見せる」ための資料を工夫して提示することが必要である。

相模原市立博物館では、相模大野駅付近を500分の1に縮小した景観模型を4つ製作している。展示室では模型のみを展示しているが、模型の製作に当たっては、長年に

わたる景観調査を実施し、多数の景観写真・地形図・航空写真・建築図面などの資料を収集している。写真1～3は、相模大野駅付近を経年的に撮影したものである。見ればたった3枚の写真であるが、この間には13年という歳月が流れている。写真1は1985年撮影、写真2はその8年後の1993年撮影、写真3は、さらに5年を経た1998年に撮影したものである。恐らく、写真1と写真3だけを並べたならば、これが同じ場所のものだと思う人は少ないのではないだろうか。かつての景観の「痕跡」としては、右手のビルがそのまま建っている程度となってしまう。この点で写真2は、この場所の景観変化の過程を伝える重要な資料となっていると言える。何となく見れば、風景が大きく変わったという実感はつかめるが、写真ではやはり「読む」という行為をしなければならぬ点もある。

このように、博物館展示として景観変化を示そうとした場合、継続的に撮影された写真によって示すことも可能であるが、「読む」という行為（技術）がある程度必要であり、また、その地域全体の土地利用や土地の起伏、質感・立体感までも直感的に伝えることは難しい。写真4は、この景観を立体的に表現した模型であるが、展示室においては、より直観的に「見る」という行為のみで伝わる情報が写真よりも多いのではないかと考える。

地域の変化を示そうとする時、景観の変化は理解しやすい材料の一つであり、中でも立体的な模型は効果が高いと思われる。しかし、安易な模型ではその情報や意図を伝えることは難しく、景観模型は地理学的に検証された諸資料をもとに製作されるべきである。





展示における昔を考える

青木 俊也 (COE教員 / 松戸市立博物館・学芸員)

1 「昔の暮らし探検 < 松戸版 >」について

松戸市立博物館では今年7月21日から11月23日まで、子ども向けの企画展「昔の暮らし探検 < 松戸版 >」を開催した。この展示会は、小学校4年生の社会科の単元「きょうどにつたわるねがい」の一節「昔の暮らし」(『新しい社会3.4下』東京書籍)の内容に関連させたものである。教科書に載せられた昔の暮らしの道具の実物資料を展示することを基本コンセプトとして、平成9年度から、毎年変更を加えながら開催している。

今回、筆者が担当した「昔の暮らし探検 < 松戸版 >」では、農家の生活資料を展示した「70年ぐらい前の農家の暮らし」と、戦後、使われ始めた家電製品や、ミシンやダイニングテーブルなどの洋風な生活を示す戦後生活資料を展示した「40年ぐらい前の暮らし」を対比的に配置して、いわゆる「昔の暮らし」から現在につながる生活の変化を表している。この展示構成によって「現在の私たちの生活がどのように形づくられてきたのか、戦後の生活のなかで失われていた様々な生活の知恵や技」を子どもにメッセージしている。そして、このメッセージを子どもが感じとれるために、実際に手に触られるように、復元した生活資料や洗い張りなどの体験学習を組み込んでいる。

2 「昔の暮らし探検 < 松戸版 >」の昔とは

さて、この「昔の暮らし探検 < 松戸版 >」がどのような年代を想定して展示しているのかを、考えてみたい。教科書のなかの「昔の暮らし」の記述では、子どもたちが訪れた博物館の「昔の家をふく元してあるコーナー」で調べた「古い道具を使っていたころの人々の暮らし」とされる。そこには明確な年代の表記はないのだが、明らかに昭和初期をイメージできる農家の暮らしのイラストが付されている。今回の展示では近代社会のただ中であり、戦争の影響が暮らしに表れ始めた「70年ぐらい前」という時期の農家の暮らしを、現在では失われてしまった生活の知恵や技があり、自然環境を利用していたとい

う特色のある暮らしのモデルとして提示している。その理由は、この展示が身近な生活の歴史を小学生の祖父母世代の人から聞き取れる時期として設定していることによる。70年ぐらい前という時期設定は、今後の年代の推移のなかで、アジア・太平洋戦争が本格化してくる時期である。そのような戦時色の影響があらわれている暮らしという状況を「昔の暮らし」のなかで考慮に入れるのかどうか判断に迫られよう。また、40年前ぐらいの暮らしは、子どもたちの父母世代の生まれた頃という意味付けをしているが、この趣旨の展示を始めた平成9年から数えた40年ぐらい前と、現在からでは8年もの年代差が生まれている。今後、40年ぐらい前という時期設定が昭和30年代から40年代へと推移していくことによって、自ずと展示資料の付け加え、変更も考えなければならぬだろう。このような時期設定は、民俗学による聞き取り調査によるさかのぼれる時期が伝承者の世代交代によって推移していくのと同様に、推移しつづけることになる。「昔の暮らし」における昔という時期のあり方を考えていくことは、子ども向けの展示に限らず生活資料を展示するときの時期設定にも通じる基本的な問題といえる。これ以上考える紙幅はないが、今後、この趣旨の展示における「昔の暮らし」の時期設定は、戦時という状況をどのように扱うかを考慮しながらも、大枠としては戦前から戦後へとその比重を移していくことになると思われる。

さて、今後の比重を増すであろう「40年ぐらい前の暮らし」で展示した戦後生活資料がどのように見られてきているのかという状況を少し整理してみたいと思う。

3 「昔の暮らし探検 < 松戸版 >」の戦後生活

この展示の時期設定は、有効に生活の時代区分として働いていたと考えられる。展示を見学した松戸市内のある小学4年生の授業では、70年ぐらい前と40年ぐらい前の暮らしをそれぞれに分けて焦点を当てた授業を行って、そのなかでそれぞれの生活に関して、地域の古老に戦前

からの地域の変貌の話を、さらに小学4年生の父母に子どもの頃の生活経験の話を聞いており、各時期の設定を生かした授業を展開している。その比較を通じて現在の自分たちの生活の良い面、悪い面を考えさせている。現在の生活をどのように考えるのかという子どもたちへ問いかけることは、この展示のメッセージと相通じているものであるが、このような使命を達成するには未だ展示の表現として不十分であり、自然環境の問題など今後課題を残している。少なくとも、現在の生活の問題にまで観覧者、子どもに意識させるためには、「昔の暮らし」の表現として、現在につながる戦後生活資料が必要であることは明らかである。この子ども向けの展示を始めた当初は、主に農家の手仕事に使われた生活資料によって構成していたのだが、平成12年度の展示から戦後の生活をテーマに加えつつ、戦後生活の変化を表現している。この戦後生活の変化を示す戦後生活資料は、いくつかの歴史系博物館で積極的に収集され集積されつつある。その基本的な位置付けとして、現代までの生活の変遷を表すためには不可欠なものとして認識されている。先の近代の文化遺産の保存と活用についての報告(平成8年7月8日)において「近代の我が国の国民の生活の理解に欠くことのできないもの」として近代の生活文化・技術の重要性が指摘されており、その特質である「科学技術の生活文化化」として家電製品などが評価されていることも相通じている。今回の展示も含めた各歴史系地域博物館による子ども向けの展示会における戦後生活資料の展示も、同様の認識を持っていると理解できよう。

4 大人が見た「昔の暮らし探検 < 松戸版 >」の戦後生活資料

さて、子ども向けであったこの展示が、その一方で様々な世代の人たちに見てもらうことも期待し、展示がそれぞれの生活の思い出を子どもたちに語り伝えてもらう場となることを意図していた。この思惑の通りに展示した資料にまつわる生活経験から、展示室において思い出を子どもたちに話しかける大人の光景はよくみられた。子どもの父母、祖父母などの様々な世代の人たちの多くが、この展示を懐かしいと感じていることは確かであった。特に展示室のおよそ4分の3を占め、農家の部屋をしつらえた「70年ぐらい前の農家の暮らし」に対して、簡略に展示台に資料を置いただけの「40年ぐらい前の暮らし」に対して足を止めている観覧者が多くみられたことは注意を引いた。特に小学生の親世代、30代から40代

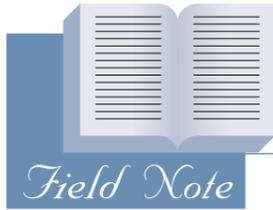
ぐらいの人たちには、生活経験に直接結び付いた「40年ぐらい前の暮らし」により強く興味を向いているようにみられた。

この傾向は、平成14年度の同じ趣旨の展示であった学習資料展「道具と暮らし」における70年前の農家の生活と40年前の団地の生活を対比した展示の観覧者へのインタビュー調査でも表れている。「農家と団地の展示のどちらに「懐かしさ」を感じましたか? その理由は?」と質問を試みたところ、半数の人が団地と答え、農家と答えた人は四分の一程度であった。30代、40代の人々の多くは団地と答え、自らの子供時代の生活経験に結びついた展示に懐かしむことを示している傾向を強く感じさせている。

もちろん、生活環境、年代の違いによって農家の暮らしを懐かしんだり、両方の暮らしを懐かしむ観覧者もいる。しかし、全体としては、共感できる懐かしさの対象が、戦前の農家の生活に対して、戦後の、特に40年前の生活に、少しずつ入れ替わっているかのようにみえる。

この戦後の生活への懐かしさは、使い古された家電製品の所蔵者の心地よい思い出とも通じている。例えば、初めて手に入れた電気釜を大切に取っておいた人にとって、このモノは自分の生活の大切な思い出の証であり、その思い出は戦後生活資料が示す急激な生活変化を肯定的にとらえた感性の表現と考えられる。「昔の暮らし探検 < 松戸版 >」が、子どもたちに向けた「現在の私たちの生活がどのように形づくられてきたのか」というメッセージは、大人にとっては懐かしさの対象の変換を迫るほどの生活経験の変化を示すものなのだろう。もちろん、観覧者の発話がそのまま資料になるわけではないが、先の小学校で父母に「40年ぐらい前の暮らし」の様子を聞き取ったように、展示室でこの時代の生活を観覧者から直接聞き取っていくことも考えられる。展示を見る観覧者や戦後生活資料の所蔵者などによる懐かしさなどの感性を通じた戦後生活の記録の集積地になりうる可能性を博物館は持っている。

再生産された懐かしさともいうべき、昭和30年代ノスタルジアの流行が、かくも長続きしている理由には、この戦後生活への懐かしさが背景になっていると思われる。子どもに対して表現する「昔の暮らし」において戦後という近い過去を表現する博物館は、このような現状とどのように関係を持つことになるのか、戦後生活の記録から考えなければならない。



ICOM2004年 ソウル世界博物館大会の参加報告

金 貞我 (COE共同研究員 / 延世大学博物館・客員研究員)

2004年10月2日から8日までユネスコ傘下のICOM (International Council of Museums) 2004年世界博物館大会が韓国のソウルで開かれた。ICOM総会は1948年に第1回大会がパリで、第2回が1950年にロンドンで開催されて以来、3年ごとに開かれることになっているが、今回のソウル大会はアジアで開催された初めての総会で、世界の博物館関係者2000名余りが参加する盛況を見せた。

神奈川大学21世紀COEプログラムからは佐野賢治、中村ひろ子、青木俊也、金貞我の4人が参加し、主にCECA (教育と文化活動国際委員会) ICOFOM (博物館学国際委員会) ICME (民族学の博物館・コレクション国際委員会) ICTOP (専門人力研修国際委員会) などの各国国際委員会による分科会に出席して、無形文化財保存と博物館の機能に関わる情報を収集し、各国の参加者と意見を交換する機会をもった。今回のソウル大会のテーマは「博物館と無形文化遺産」であり、神奈川大学COEプログラムと関連のある多くの情報を得ることができた。

ユネスコと無形文化遺産の保存

ユネスコが世界の遺物や遺跡など有形文化財を人類文化の遺産として指定し、保護に乗り出したのは1970年代からのことであるが、無形文化遺産に対する保存を本格化させたのは1990年代に入ってからである。すなわち、1997年、ユネスコの第29回の総会で「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」が採択され、1998年にはユネスコの執行委員会と同制度の実施に関連する規約が制定されるなど、無形文化遺産の保護とその保存の重要性が国際社会で認識されはじめた。無形文化遺産とは、人類が文化共同体のなかで作り出す社会的習慣や儀礼、美的伝統、知識の形式及びそれを行うための道具や事物、あるいは自然の空間をも含むものを指すが、このような無形文化遺産の保存の課題は従来の博物館のあり方(収集、保存、展示)に対する根本的な見直しを迫るものであった。そして、2002年10月には、ICOM傘下の地域組織であるICOM-ASPAC (Asia-Pacific Regional Organization) が中

国の上海で開かれ、無形文化財に対する博物館のガイドラインとして上海憲章 (Shanghai Charter) が採択された。上海憲章は「民族や地域共同体における創造や融合、そして特殊性を認識し、その共同体の価値、伝統、言語、口伝の歴史、生活などの保存が博物館の活動のなかで理解され、また推進されていくことを支持する」という理念のもとで、有形と無形の自然遺産および文化遺産を統合する学際的な方法論と地域を横断する新たな取り組み方の確立を宣言するものであった。そして、今回のICOMソウル大会は、いままでの博物館の機能を反省し、無形文化遺産の保存の重要性を再確認すると共に、世界各国の博物館と美術館関係者に無形文化遺産の保存に関する新たな取り組みを訴えるものであった。

アジア初のICOMソウル大会開催の意義

このたびのICOM世界博物館大会がソウルで開催されたのは、韓国の「人間文化財保護制度」が無形文化財保護・保存の側面から大きな成果をあげたと評価されたことによる。

1962年から実施された韓国の無形文化財保護制度は、有形文化財が長い植民地統治や戦争などから略奪、破壊、または紛失され、文化財というべき「モノ」があまり残されていないという憂慮から制定されたといわれている。その無形文化財保護策の一つである人間文化財制度は、保存の価値のある伝統芸術・儀礼・工芸技術の分野からもっとも優れた伝承者を指定し、後継者の養成を通して無形文化遺産を断絶させず次の世代に伝承していくことを目的とする。現在、重要無形文化財として109種目が指定されており、人間文化財は213人が認定され、伝承・保護されている。この人間文化財制度は、1993年にユネスコ執行委員会の決定により無形文化財の保存に効果的な制度として採択された。以上のように韓国の無形文化遺産の保存制度とその政策が高く評価されたことから、2004年のICOM世界博物館大会がICOMの歴史上、初めてアジアで開かれることになったのである。

記憶共同体としての無形文化遺産 分科会での報告例
ソウル大会では無形文化遺産の復元と保存政策について、a) ニュージーランドの Te Papa Tongarewa博物館の例 太平洋文化における無形文化をオーディオとビデオによってデータを記録し、保存のためにネットワークを作ろうとする試み、b) 南アフリカのIziko博物館の事例 地域自治に基盤をおいた国立博物館と地域社会博物館の無形文化遺産の保護活動、c) 記憶共同体と無形文化財 人の記憶を呼び起こす力 (韓国の全羅南道のハウイ村に、長年失われていた村の祭りが復活することによって、村民の共同体としての記憶が取り戻された事例) d) アフリカからの学芸員の発言として、侵略・内戦による村の破壊と住民の強制移住の状況、などが報告された。

中でも、もっとも強烈な印象を残したのは、外国からの侵略、または内戦などにより村が破壊され、住民が移住を余儀なくされたアフリカの事例をめぐる熱い討論であった。その内容は、内戦で破壊された地域に博物館を建設し、伝統的な住宅と生活道具などを収集・展示したが、それだけでは固有の文化が復元したとは言えず、その地域に村民を呼び戻し、かれらの共同体の生活が自然環境のなかに復活して初めて文化の復元が可能となるのではないか、という無形文化遺産の保存活動が直面する共通の難題を指摘するものであった。

実際、従来の博物館は有形文化財を取り扱うことには多くの経験と蓄積を持っている。しかし、無形文化遺産の場合、多くの文化財は博物館の外側に存在するため、無形文化遺産の保存は生きている人間と共に行う作業になり、また、実際の行為文化を考慮した空間づくりが要求される。人間の行為を保存するためのデータの記録などにも今までとはまったく異なる方法や工夫が必要である。その任務は、従来の有形文化財を取り扱ってきたように、将来的には既存の博物館が担っていかなければならない。博物館に新たな方法論の模索と挑戦が求められる所以である。

新たな博物館の機能への模索

無形文化遺産の保存と博物館の役割に対する高い関心に関連して注目されたのが、ICTOP (専門人力研修国際委員会) の「専門的な博物館発展のためのICOM教育過程ガイドライン」であった。

ICTOPは1971年、博物館における専門的訓練と研究に関する初の教育過程ガイドライン (Basic Syllabus) を制定したが、さらに2000年には無形文化遺産に対する博物館の役割の重要性を鑑み、地域社会と密着した展示の

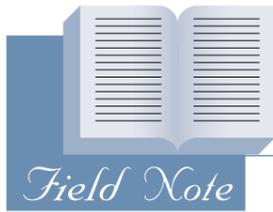
提供と地域住民の人的資源を活用した展示方法の開発などを重視する「地域共同体の博物館」の概念を加えた、新しい改訂版を作成した。

このように従来の博物館のあり方に対する反省と無形文化遺産に対する世界の関心が急速に拡大する中、無形文化遺産の保護と保存には多くの問題点が存在していることも議論された。たとえば、本来であれば共同体の歴史や社会の発展と共に変貌していくはずの無形文化遺産が、保護と保存という名のもとで真空パックに閉じ込められるようになるのではないかと、文化財の剥製化の懸念があげられた。さらに、人間文化財制度と関連して、文化財の序列化が文化の優劣を生み、利権とつながる恐れがあることも指摘された。また、無形文化遺産の保存策がもっとも陥りやすい問題として商業主義と観光資源化があげられた。無形文化遺産の誤った観光資源化で、人類の文化遺産が単なる曲芸や見せ物化につながる恐れがあるとの声もあった。

以上、ICOM2004年ソウル世界博物館大会で得た情報の中で、特に印象に残った事項を中心に報告をまとめた。ICOMは博物館関係者の国際的な集まりであり、博物館に関する膨大な情報が流れる情報交換の場でもある。その意味でもICOMの活動には今後も注目してゆく必要がある。次回の2007年ICOM世界博物館大会は「博物館相互理解の原風景」というテーマで、オーストリアのウィーンで開催される。



ICOM2004年ソウル世界博物館大会のエンブレムになった「ソッデ」(村の守護標、韓国)



南洋群島に神社をたずねて

大坪 潤子 (COE研究員・RA)

南洋群島で日本統治下の神社(跡)の調査をするという話をいただいた時は正直躊躇した。サイパンやパラオは現在観光地として定着し、ロタやテニアンも人気上昇中のように見えて、自分は一生行くことがないと思っていた。過去に日本がそれらの地を統治し、アメリカ軍との間に壮絶な戦いがあり、現地の人々を巻き込んで多くの血が流されたことなどを考えると、訪れるにはあまりにも気分が重くなる場所だった。行くことがない、ではなく、行きたくない、が本音だったかもしれない。結局、その重さを抱えたまま、初めて南洋の地に足を踏み入れることにした。期間は2004年8月7日から16日、調査対象地は北マリアナ連邦マリアナ諸島のロタ島、テニアン島、サイパン島、パラオ諸島のバベルダオブ島(パラオ本島)、ペリリュー島、コロール島(調査順)である。調査はその大部分を現地に住む日本人や博物館、H.P.O(Historical Preservation Office)スタッフの協力に負った。我々教員2名(中島三千男、富井正憲)と大学院生2名(サイモン・ジョン、大坪)の計4名は、まず現地でごうした協力者や機関とコンタクトをとり、資料入手し、車を手配して神社(跡)をたずねた。中島は聞き取りと写真撮影(他の3名も各々記録写真撮影)、富井は現地の実測図作成、サイモンはそれらの補助と通訳、大坪は補助および記録を担当した。神社(跡)まで、はスムーズに辿り着いた所があれば、「見たことがある」という話をたよりに数時間探し回った所もある。調査は連日10時間を超え、出発前の準備不足を痛感することも幾度となくあったが、それでも現地の協力者のおかげで、多くの収穫を得ることができたと思う。

調査した約20社のほぼ3割は、「密林の中に埋もれていた」という印象がある。もっとも我々が訪れたのは1年で最も植物が繁茂する時期だそうで、またテニアンのように月に2回も北マリアナ連邦政府の予算で草刈りや清掃がなされているという場所でも、台風のためにそれが延期されていた。訪れる時期によっては印象も作業内容もかなり違っていたのだろうが、とにかく今回は、現地の日

本人や博物館関係者の先導に従って、草を払い、枝をかき分け、蔓を引き抜いて、ようやく鳥居や燈籠の痕跡から拝殿や本殿の跡まで辿りつくといった調子。鳥居や燈籠などは倒れて草に埋もれていることもあり、神経を張り詰めてこれらを探す(帰国後も癖がついていて、ふと電柱などを見るとドキッとした)それでもだんだん目が慣れるにつれ、そこにかつて参道が続き、開けた眺望を持つ本殿に続いていたさまが想像できるようになった(写真1)。

その他を大別すると、今でも人々が集う場所として宗教(キリスト教)や娯楽の場として生活の中に機能している神社跡、そして、整地され、ほとんど痕跡を留めない神社跡地があった。例えばロタ神社は巨大な洞窟(Tonga Cave)の前に位置し、現在は洞窟を抱く崖の上に十字架がそびえ、本殿跡にはキリスト像が安置され、拝殿跡は集会所になっている。洞窟は古くから台風時の避難場所として利用されてきたもので、日本海軍は野戦病院として使用した。テニアンの和泉神社は、本殿跡にカトリックの聖人イシドロ農夫(スペインの農業守護聖人)を祀り、年に1度、近隣から数百人が集まって、朝から盛大なフェスティバルが行われるという(サン・イシドロ祭)。前者は明らかに神社が建てられる遙か前から人々が集まる機能を持ってきた場であって、後者は神社以前を確認できていないが、少なくとも単に境内地や建物を利用したというだけでなく、聖人を祀るにもふさわしく、また人々が集いやすい条件を持つ場ということなのだろう。ほかにも、最初に調査したロタの大山祇神社(別名マニラ神社、調査時は傍でバーベキューパーティーが行われていた)やサイパンの八幡神社は、自然の岩石がいかにも「磐座」や「聖域」を思わせ、八幡神社そばに住むおじいさんが「これほんとの話」と教えてくれた、「家の前を通って参拝し、どこからか現れた白馬に乗って帰る女性のイリュージョン」など、さもありがた、の場であった(写真2、写真3)。

我々が「Shinto shrine」を探していると言うと、「知

っている」と思いがけない所に案内されることもあった。パラオのバベルダオブ島では、観光地として有名なガラスマオの滝(には行っていないが)の近くに清流があって、この川上にshrineがある、と近くの集落の若い男性が言う。水は冷たく澄んでいて、そう深くはないのだが黒光りする川底に足を滑らせそうになりながら溯ると、果たして上流の木々の根元に小さな水天宮の祠があった。その祠の存在が奇妙なほど自然なものに思われ、自分は今どこにいるのだろうと一瞬戸惑ったが、直後にスコールでずぶ濡れになり、ああここはやはり南洋なのだとかみしめつつ帰路の山道を登った。山中にはかつてボーキサイトの運送に使ったトロツコのレールがところどころに姿を見せている。続いて「もう一つ知っている」と言われて行った場所は小さな山の麓で、こちらはすぐに鳥居の基礎が見つかった。林の中を15分ほど登っていくと急に視界が開け、広々とした草原の頂上に拝殿と本殿の基礎が残っている。周囲の海、山、村落を見渡せる一等地である。この神社は事前の調査資料に見当たらず、名称も不明であるが、現在ここに神社跡があるだけでほかに何の記録も、新しい利用も無いのがひどく不思議だった。

今回調査したのはいずれも、現地での何らかの情報に基づいて辿りついた跡地であり、我々は発見でなく確認の作業をしたに過ぎないのだが、一方で、当時の資料を集め現状を把握し記録に留めること、そこから南洋の神社をめぐる景観の変化を読み解こうとすることの意義は軽くないだろう。

さて出発前の重い気分は、調査中に戸惑いが加わって、帰国後も整理がつかないでいる。神社跡以外にも調査中に見ることのできた、日本統治の痕跡や戦跡(現在も使われている建物や日本語、スーサイドクリフ、バンザイクリフ、原爆搭載場、海軍航空隊司令部など)。これらを前に語ってくれたのは現地の日本人や博物館などのスタッフだった。彼らは史跡としてこれらを伝え、あるいは調査・保存を行いたいと言っていたが、話の深いところまでは汲み取れなかったし、島で暮らす他の人々はこれらに、ひいては日本に(観光としての価値を別として)どのような感情を抱いているのか。今回聞き取りは僅かしか行えず、もし多く行ったところでどこまで話してくれ、解釈しうるものか判らないが、答え慣れた口調で「日本時代は良かった」と語られても素直に信じる気にはなれなかった。一方現地の日本人によれば、往々にして被害証言の方が期待されるので、フィクションを

加えて語ってしまう老人もいるとのこと。今回に限らず、聞き取りの難しさを考えさせられる問題である。依然観光で行く気にはなれないけれど、まずは先入観なしに、南洋と向き合ってみようと思う。



写真1 テニアン島アシガー NKK神社か



写真2 ロタ島マニラ高地 大山祇神社



写真3 サイパン島東村 八幡神社

海外 博物館 事情



中国・国家主導の博物館事業

王 京 (神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科・後期博士課程)

明治36(1903)年3月、大阪の第5回内国勸業博覧会場に一人の中国人がいた。1894年の科挙の状元で、日清戦争後、故郷の南通で実業(大生紗廠など)と教育(農学校と師範学校など)に力を注いだ張謇である。1905年、彼は清朝の「新政」を推進する重臣張之洞に北京で「帝国博覧館」の建設を、また「学部」に「博覧館」の建設をそれぞれ上奏し、皇室の収蔵品を一般に公開し、各省にも博物館をつくり学校教育に資することを訴えたが採択されず、自ら模範を示すために南通師範学校の一部に動物園、植物園と文化財や標本を収蔵展示する「博物苑」をつくった。中国人による博物館の事始めである(図1)。張謇が構想した国家主導の博物館事業は、その時代には実現されなかったが、辛亥革命以降、中国の博物館事業発展の大きな土台となった。ここでは国家がリードするという視点から中国博物館発展史の一面を辿ってみる。

1 中華民国・初めての試み

中華民国建国直後、中国最初の国立博物館が構想された。1912年6月教育部総長蔡元培がまず北京に博物館をつくることを提案し、同月25日、準備に当たる社会教育司の第一科長である魯迅が「国子監及学宮」を視察した。7月9日「国立歴史博物館」準備室が国子監で発足し、1917年故宮の正門近くに移った。1926年10月10日、建国記念日に合わせて博物館は開館し、金玉、刻石、明清檔案、国子監文物など10部門からなる展示を始めた。北京の『世界日報』12日の記事は、入館者はのべ7万人に上り、盛況だったと伝えている。

しかし、その後の発展は順調ではなかった。1927年に『教育部歴史博物館規程』が作られたが、翌年6月から博物館の所属は、教育部 大学院 教育部 国立中央研究院歴史言語研究所を転々とし、さらに1933年南京に「中央博物院」準備室が創設されると、その管理下となり、収蔵品の一部が南京に移された。日中戦争や国共内戦の混乱を経て1949年軍事管制委員会の下に移管したとき、収蔵品は1926年当時、26部門215,200点(『国立歴史博物館陳列物品目録』、同『収蔵物品目録』)の5分の1を下

回る39,592点であった。また当時、全国の博物館計25館のうち、外国人がつくったものが9館を数えた。

2 新中国・主調は革命

中華人民共和国建国後、博物館事業は教育の一環として重視され、国家主導で大いに発展した。「国立北京歴史博物館」として再発足した歴史博物館は、1950年の「原始社会陳列」を手始めに、1958年には「明清陳列」を完成した(その前に「近代史陳列」が1956年に完成)。この時、マルクス主義の発展段階説による歴史教育に重点が置かれ、考古学の成果を王朝時代順に配列するという中国博物館の基本展示モデルが作られた。

そしてなによりの特徴は革命史の重視である。1951年3月に「中央革命博物館」準備室が成立し、国史と並列する革命史教育の博物館が構想された。6月16日政務院は『為徵集革命文物令』を発令し、1919年五四運動から1949年までの新民主主義革命を中心とした、革命関連の文献と物品を「中央革命博物館籌備処或いは各大行政区、省市文化教育機構に集中し保管」するよう指示した。

1958年北戴河会議で中国歴史博物館と中国革命博物館の設立が決定され、1959年初めの『陳列原則』では歴史博物館の「中国通史陳列」が1840年のアヘン戦争まで、革命博物館の「中国革命史陳列」が1840年から決められた。同年8月には両館共用の建物が天安門広場の東側に完工し、国家のシンボリック建築物となった。

地方では1959年までに、寧夏(1973年)、青海(1986年)、海南(1990年)、チベット(1999年)を除いて省市自治区の総合博物館が開館し、博物館の全国システムの骨格が出来た。当時「地誌博物館」とも呼ばれたこれら省立博物館は、「自然資源」「歴史発展」「民主建設」を三つの柱とする文化部の『意見』(1951年)を受けているが、実際の展示には「自然資源」「古代史」「革命史」(民族地域はさらに「民族事情」という構成が多く、地域に密着しながら革命史観を色濃く呈している。さらに専門的な革命博物館・記念館は、地誌博物館づくりが一段落した1959年から多く建設された。

ところが1966年に文革が始まると歴史・革命二館を始め、中央と地方の多くの博物館が閉館を余儀なくされ、1977年までに新しく開館したものは僅か西柏坡記念館、安源路鉱工人運動記念館など革命関係のものだけであった。

3 文革後・革命からの離陸

1980年代から博物館発展は第二のブームを迎えた。1982年中国博物館学会が発足し(翌年ICOMに加盟)同年11月『中華人民共和国文物保護法』が施行された。文物系統の博物館は1992年になると1950年代の70余から1,100余に増えたが、徐々に革命色が薄まったことが大きな特徴である。『中国博物館志』によれば、1966年以前、省立博物館以外はほぼ革命一色であったが、文革後、地質、少数民族博物館や紡績、茶葉などをテーマとする地方の産業博物館などが着実に増加し、80年代中期以降新設博物館の主流になっていった(表1参照)。また省立博物館の自然資源の部と革命史の部も縮小するか、専門博物館として独立したケースが多い。

表1 文革後新設博物館の変容
(『中国博物館志』1995年に挙げられた主要な博物館に限る)

種別	1978	1979	1980	1981	1982	1983
革命	4	1	2	2	3	0
其他	3	4	1	1	4	3

種別	1984	1985	1986	1987	1988	1989
革命	2	4	2	1	2	0
其他	6	10	15	5	6	8

1996年の「社会主義精神文明建設」を強化するための決議では、博物館の重要性がさらに強調され、従来の歴史と革命の二館を統合する「中国国家博物館」の設立が決められた。翌年、中国の博物館を総覧するプロジェクトが発足し、香港、マカオ、台湾を含む総ての省市自治区から100館が選ばれ、3年間38万キロの取材による、102回ものドキュメンタリー映像シリーズ『中国の博物館100の博物館が物語る過去』(DVD26枚組、中国語・英語、国際文化交流音像出版社販売)が完成し、1999年に放送され、大きな反響を呼んだ。「全国博物館の優れたも

の、特色のあるものをひとつも漏らさず(説明文)と宣言しているこのシリーズには、革命を主題とした博物館は全く見られず、中国革命博物館さえ入っていないかった。

4 21世紀・新たな情熱

2002年10月28日、非移動文物・考古発掘・施設収蔵文物・民間収蔵文物など8章80条からなる新しい『文物保護法』が可決され、翌年、初めての博物館専門法『博物館条例』の草案も完成した。

そして2003年2月28日中国歴史博物館、中国革命博物館が中国国家博物館に生まれ変わった。かつて二館は1966年から1983年まで「中国革命・歴史博物館」として合併していたが、今回はそれとは異なり、革命史から豊かな近現代史へという史観の根本的な転換が国家レベルで示されている。40億円で増改築される国家博物館は、2008年北京オリンピックに合わせて開館する予定で、アメリカのメトロポリタン美術館、イギリスの大英博物館、フランスのルーブル美術館に匹敵する、博物館大国、中国を象徴する施設として位置づけられている。

地方においても北京、天津、四川で省レベルの新館をつくるほか、特色ある博物館の新設をサポートし、2015年までに更に1,000館を増やしていく計画であるという(2002年12月全国文物事業会議)21世紀に入り、中国は博物館事業に対する新たな情熱を見せ始めている。(図2)

しかし中国の博物館事業は、市場経済に対応する体制の模索、専門人材の育成、博物館関係の立法や財政の確保、展示や社会教育における創意工夫など、直面する問題がまだ数多く、その見通しは明るいものだけではない。新たな時代、国家主導の博物館事業は如何に発展を遂げ、またどのような特徴を見せるのか、見守っていきたい。

参考資料

中国博物館学会編『中国博物館志』北京華夏出版社、1995
王宏均主編『中国博物館学基礎』(改訂版)
上海古籍出版社、2001



図1 張謇(1853~1926)と南通博物苑の自筆の双幅



図2 中央テレビ局CCTV-10の新番組『五日談・博物館』(2004年2月より木曜午後8時放送)と「2004北京国際博物館々長フォーラム」開催後に放送された特集「博物館に親しむ」(5月26日放送)のテーマ画面

周期祭の背景

櫻村 賢二 (COE研究員・RA)

注目される周期祭 - 西金砂神社の小祭礼と大祭礼

日本各地には毎年ではなく、3、5、7年など数年ごとの祭りがある。毎年の祭りは季節ごとに行なわれることから「年季祭」と呼べるのに対し、季節ではなく数年毎という周期を重視する祭りを私は「周期祭」と呼ぶことにしている。

周期祭としては20年毎の伊勢神宮の式年遷宮や、7年毎の諏訪大社の御柱祭りが有名であるが、私が最も注目する周期祭は茨城県常陸太田市（旧久慈郡金砂郷町）の西金砂山の西金砂神社の祭りである。常陸北部の山岳信仰の拠点として中世には豪族佐竹氏に信仰され、近世には水戸藩による干渉を受けながらも田楽や祭りの復興が行われてきた。西金砂神社には7年目ごとの丑・未年の3月のみに執行される小祭礼と73年目ごとの未年の3月に行なわれる大祭礼という周期祭があるが、大祭礼は磯出祭とも呼ばれ、昨年、平成15年に盛大に行われた。

小祭礼は西金砂神社から約15Km離れた常陸太田市馬場町の馬場八幡宮まで2泊3日で神輿が渡御し、途中数ヶ所で神事と田楽舞が執行される。また西金砂神社からは使者が金砂の神が上陸したという水木の磯に赴き、潮水を汲み上げ持ち帰り神輿の帰還後潮水神事がおこなわれる。大祭礼は6泊7日の日程で、神輿が水木海岸まで約35Kmを要所で神事と田楽を執行しながら渡御し、潮水神事を行い帰途も数ヶ所で神事、田楽を執行しながら西金砂山に戻る。

小祭礼の丑・未年は凶年で、大祭礼の未年はさらに凶年とされる。凶年とは具体的にいえば凶作であり、小祭礼、大祭礼で田楽舞が執行されるのは凶作を阻止するためとされる。

周期祭と穀霊

凶作を阻止し五穀豊穡を願う西金砂田楽は四方固め(写真1) 獅子舞、種子蒔き、一本高足の四段で構成される。その種子蒔きの時に田楽宰主が枡に入った種籾を観衆に向かって撒く(写真2)。観衆はこのとき雨も降っていないのに傘を広げ逆さまにして多くの種籾を拾おうとする。農家ではこの拾った種籾を自分の家の種籾に混ぜると豊作になるといっている。また73年目ごとの大祭礼の田楽で撒かれた種籾は持っているだけでも72年間、食べることは不自由しないという。この種籾分与は実は強い霊力をもつ穀霊の分与であるというのが、私の考えである。

凶作、飢饉になるのは神が祭りを必要とする状況にあり、農家の種籾の穀霊の衰退によるもので、神から分与された強い霊力をもつ種籾を混ぜることによって種籾全体に強い霊力を感染させ、豊作へと導く。西金砂神社から程近い近津神社（久慈郡大子町）では当屋が枡に入れた籾を神として7年間祭祀する御枡廻し神事があるが、籾は7年間生きていて凶作時に種籾として人々を救うとしており、穀霊衰退の目安が7年であることは小祭礼の7年周期での執行と田楽において新たな種籾（穀霊）が分与される事と関係する。

大飢饉が起きていた天明7年の大祭礼の記録には凶作である大祭礼の年には五穀の種を取替えるとしているが、これは大祭礼が豊年を願う神の更新であり、また五穀の穀霊の更新がおこなわれる祭りであることを示している。つまり周期祭には穀霊信仰との係わりがあり、周期祭を検討することは、民俗学上の穀霊研究の再検討につながる事が予測される。



西金砂田楽「四方固め」



観衆に種籾を撒く田楽宰主

獅子で付き合う、獅子で競う 広東の醒獅

彭 偉文 (COE研究員・RA)

醒獅とは、嶺南醒獅、広東醒獅とも言い、広東獅子舞の代表的な一つであり、珠江デルタにおける獅子舞である。現在、世界で「チャイニーズライオンダンス」と言われているのは、実はこの中国のごく一部で行われる醒獅であり、中国におけるさまざまな獅子舞のなかで際立つ存在と言ってよいであろう。

中国の漢民族地域に獅子舞が散在しているが、元々、獅子（ライオン）は生息せず、その語源も不明である。最初は「師子」と書かれていた様である。『後漢書』の巻三で、漢・章和元年（87）に西域から「師子」が献上されたことが記されている。約550年前後に書かれたとされる『洛陽伽藍記』に、仏像巡行の行列に「有辟邪獅子、引導其前」とあり、獅子舞が初めて史料に姿を現した。以来、随筆や詩文などに折々見られるが、唐の中期までに、漢民族の間に広がっていたと断言するには、更なる検討が必要である。漢民族の民間芸能としての獅子舞の定着について、まだ明らかでないが、宋の「百子嬉春図」で、子供遊びの獅子舞が描かれており、現在中国でよく見られる獅子舞の形はすでに整っていたと思われる。

獅子舞の長い歴史の中で、醒獅の歴史は浅い方である。伝承によれば、清・乾隆時期（1736～1775）まで遡る。明代に登場したとも言われるが、清の初期に書かれ、広東の歴史や地理、人文などが詳しく描かれている『広東新語』に醒獅の記載がないことから、その事実は明らかである。

醒獅は歴史こそ浅いが、無視できない存在感を増してきたことから、清・民国時期の地域社会に強く関わっていたと思われる。

珠江デルタはそもそも豊かな自然に富み、清の康熙から200年近く続いた鎖国政策の中で、広州は巨大な帝国における唯一の合法的な国際貿易港であり、正に中国で最も恵まれている地域であった。広州は急速に成長し、生業から日常生活に至るあらゆる面で周辺地域に影響を及ぼしていた。仏山、順徳などは衛星都市として発達し、その周辺農村を生糸などの原材料の生産地に転換させた。恵まれているとはいえ、狭い地域でありながら、高い人口密度と経済規模の拡大により、激しい競争が生まれ、協力の必要性も高まった。したがって、霊獣舞としての醒獅は招福、厄除けのほか、都市のように法律が整っていない農村地域では、村同士の“付き合い”と“競い”の

役割も果たしてきた。

醒獅の最も大きな特徴と言えば、その武術との繋がりにある。レベルはまちまちではあるが、醒獅ができる人は武術ができる人と、地域社会では認識されている。清代には、広東の武術はすでに十分熟しており、武術人口も多かった。そうしたことから、醒獅の技は難しく華やかになり、ある程度定式化されたことにより、競うことが可能になっていった。都市部の武術をする人の間では、醒獅は戦わずに勝負する手段の一つとして用いられる一方、農村部では、いまなお行事と結びつき、村同士の親交と競争の手段となっている。

農村における醒獅比べは、主に旧小正月の前後に行われる。村ごとに期日を決め、友好関係のある村に招待状を出し、醒獅大会を開催する。当日、小学校のグラウンドや広場で宴会を開き、来客が多ければ多いほど、村の実力が誇示され、好運が齎されると信じており、来る人皆にご馳走する。その後、来客に囲まれる中、参加者の年齢や技のタイプにより、何組かにわけて醒獅比べを行う。賞金は多くはないが、勝利は最大の名誉となる。

このような村同士の“付き合い”と“競い”の性格を持っている地域的な行事は、醒獅大会以外にもまだいくつかある。友好関係があれば招待し、なければ往来はしないが敵ともしない。地域社会の微妙なバランスを保持する大きな力になっている。



醒獅の典型的な獅子頭のひとつ、『三国志』の劉備をイメージしている。



受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2004年8月～11月）

タイトル	発行所
中山 右尚編『近世薩摩における大名文化の総合的研究』	鹿児島大学教育学部国語研究室
Don A. Farrell著『Rota ロタ』	Micronesian Productions,CNMI (H.P.O: Rota寄贈)
Scott Russell著『Tiempon Aleman』	CNMI Division of Historic Preservation (H.P.O: Tinian寄贈)
沖縄県文化振興会編『旧南洋群島と沖縄県人 近代2』	沖縄県教育委員会 (H.P.O: Tinian寄贈)
D. Colt Denfeld and Scott Russell著『Home of the Superfort』	The CNMI Division Historic Preservation(H.P.O: Saipan寄贈)
The Division of Historic Preservation Department of Community and Cultural Affairs『Protecting Our Past』	CNMI Division of Historic Preservation (H.P.O: Saipan寄贈)
Scott Russell著 『An Archaeological Survey of the Hachiman Jinja Site Kannat Taddong Papago, Saipan』	CNMI Division of Historic Preservation (H.P.O: Saipan寄贈)
Dr. Aurora G. Del Rosario, Dr. Nelson M. Esguerra著 『Medicinal Plants in Palau volume1』	PCC-CRE Publication (H.P.O: Palau寄贈)
Japan and Palau Friendship Association編 『What your grand fathers and mothers did』	Japan and Palau Friendship Association(H.P.O: Palau寄贈)
D. Colt Denfeld著 『Japanese World War Fortifications and Other Military Structures in the Central Pacific』	North Valley Diver Publications (H.P.O: Palau寄贈)
De Vern Reed Smith著『Palau Ethnography』	Micronesian Endowment for Historic Preservation Republic of Palau (H.P.O: Palau寄贈)
David Snyder他著『Palau Archaeology』	Micronesian Endowment for Historic Preservation Republic of Palau (H.P.O: Palau寄贈)
Dr. Carmen C. H. Pertrosian-Husa他著 『Ngardmau Ethnography』	Bureau of Arts and Culture Palau Historic Preservation Office (H.P.O: Palau寄贈)
Rudolf von Bennigsen著 『The German Annexation of the Caroline, Palau & Mariana Islands』	CNMI Division of Historic Preservation (H.P.O: Palau寄贈)
	H.P.O= Historic Preservation Office CNMI=Commonwealth of the Northern Mariana Islands
公開ワークショップ『唐代ナリッジベースの可能性』報告書 オープンフォーラム『漢字文化の今』報告書 特別講演会『中国における書物の傳統』報告書 『書体・組版ワークショップ』報告書	京都大学21世紀COEプログラム 『東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 漢字文化の全き継承と発展のために』
『ニューズレター』No.5 年次報告書	京都大学大学院法学研究科21世紀COEプログラム 『21世紀型法秩序形成プログラム』
『ニューズレター』No.2	近畿大学 21世紀COEプログラム 『クログロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点』
『Newsletter 2004』No.2、3 欧文紀要	慶應義塾大学21世紀COEプログラム『多文化多世代交差世界の 政治社会秩序形成 多文化世界における市民意識の動態』 21COE多文化市民意識研究センター
シンポジウム『第1回神戸大学 ワシントン大学国際シンポジウム』報告書	神戸大学大学院自然科学研究科 『安全と共生のための都市空間デザイン戦略』
『Wind Effects News』No.4	東京工芸大学工学研究科 風工学研究センター
『DALSニューズレター』No.6、7	東京大学大学院人文社会系研究科21世紀COEプログラム 『生命の文化・価値をめぐる死生学の構築』
『News Letter』No.2	東京大学大学院21世紀COE『心とことば 進化認知科学的展開』
研究拠点事業概要	東北大学大学院医学系研究科21世紀COEプログラム 『シグナル伝達病の治療戦略創生拠点』
平成15年度成果報告書	豊橋科学技術大学21世紀COE拠点形成プログラム 『未来社会の生態恒常性工学』
『ニューズレター CISMOR VOICE』	同志社大学CISMOR21世紀COEプログラム 『一神教学際研究センター』
平成15年度報告書 国際ワークショップ『抗体創薬の戦略』報告書	藤田保健衛生大学21世紀COEプログラム 『超低侵襲標的化診断治療開発センター』
『日本の中の異文化 蝦夷の世界』(研究報告第4集2003)	法政大学国際日本学研究センター『日本発信の国際日本学の構築』
研究拠点事業概要	横浜市立大学21世紀COEプログラム 『細胞極性システム研究に基づく未来医療創成 (からだの形づくりの仕組みの解明から病気の克服へ)』

主な研究活動

研究推進会議

第5回 9月29日

海外研究機関との覚書締結、海外提携
研究機関への若手研究者の派遣、COE
概要の刊行他

第6回 10月27日

COE教員人事、2005年度事業計画、
2005年度予算編成の基本的考え方、文
部科学省に提出する中間報告書作成準
備他

全体会議

プログラム推進における研究担当者間での共通認識・連携を深めるために、
研究推進会議等での決定事項を報告する場として開催されている。プログラ
ム開始以来通算10回を数える。

第9回 9月29日(於：横浜キャンパス1号館 804会議室)

2003年度外部評価に対する具体化の方策と実施報告、海外研究
機関との覚書締結 他

第10回 11月12日(於：横浜キャンパス1号館 804会議室)

来年度予算編成の基本的考え方、各班研究の進捗状況と課題、年
報第2号刊行準備 他

研究会

(9月～11月実施分)

全 体

9月29日 田口 洋美 / 景観のモニタージュ 狩猟と農耕の織り成す世界

富澤 達三 / 画像資料のデジタル化と歴史研究への活用

11月12日 落合 一泰 / 絵画から写真へ 非西洋諸民族表象における変化と無変化

班

9月13日・3班 環境としての海・資源としての海 アワビ・ワカメ・イリコ(煎海鼠)

香月 洋一郎 / 現代における素潜り漁法 上五島を中心に
李 善愛(宮崎公立大学) / 海女の移動と環境 韓国のワカメ漁場利用をとおして
赤嶺 淳(名古屋市立大学) / ナマコをめぐる国際環境と生産地の動向

9月14日・1班 ジョン・ボチャリ / 『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さんについて

9月24日・1班 田島 佳也 / 近世・近代の『常民生活絵引』の試作本の作成について

中村 ひろ子 / 『近世・近代生活絵引』の編さんについて
『江戸名所図屏風』をテキストとして江戸初期の生活絵引きを編む試み

10月20日・1班 金 貞我 / 『日本常民生活絵引』英語訳のための実例

ジョン・ボチャリ / 『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さんについて

10月29日・4班 『情報発信の場としての博物館：“個別”と“普遍” ヨーロッパ博物館事情』

佐野 賢治・中村 政則 / オーストリア・ドイツの民俗系博物館
的場 昭弘・橋川 俊忠・能登 正人 / フランスの博物館・美術館
中村 ひろ子・青木 俊也・金 貞我 / ICOMソウル大会参加記

11月10日・1班 ジョン・ボチャリ / 『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編さんについて

11月26日・3班 竹内 啓一(元人文地理学会会長・一橋大学名誉教授) /
地理学における景観 風景概念の変遷と問題点



主な研究活動

現地調査

(2004年8月中旬～11月実施分)

山口 建治	新潟県佐渡市 (8月13日～14日)
新穂地区における人形芝居調査	
田口 洋美	長野県下水内郡栄村秋山郷一帯 (8月16日～23日)
秋山郷における環境と景観に関する現地調査	
佐々木 睦	中国 広東省潮州・汕頭 (8月16日～23日)
香港・広東の寺院、祠廟における画像調査およびデジタル記録の実施	
北原 糸子	山形県酒田市 (8月17日～19日)
酒田市立光丘文庫における庄内地震に関する写真所在調査	
河野 通明	福島県会津若松市・山形県南陽市他 (8月18日～28日)
福島県立博物館他における在来農具の比較調査	
菊池 勇夫、田島 佳也、富澤 達三	鹿児島県鹿児島市・奄美大島 (8月19日～22日)
笠利町歴史民俗資料館、名瀬市立奄美博物館他における南島関係の画像資料調査	
橘川 俊忠、能登 正人、的場 昭弘	フランス パリ (8月21日～29日)
ルーブル美術館・オルセー美術館他における博物館・美術館の情報発信方法の調査	
八久保 厚志	北海道白老町 (8月23日～25日)
白老地区における旧アイヌ居住地区および周辺地域の景観の記録	
金子 隆一、増野 恵子	福島県福島市・会津若松市 (8月25日)
福島県立博物館、福島県立図書館等における災害写真の調査・研究	
菊池 勇夫	北海道函館市および周辺地域 (8月27日～29日)
大成町郷土館・厚次部郷土資料館・熊石町歴史記念館他における道南地域に関する画像資料調査および菅江真澄日記関係地巡見	
中村 ひろ子	福島県南会津郡 (8月28日～29日)
会津地方(只見町)の画像資料の収集・調査	
山口 建治	中国 上海・南京 (8月31日～9月8日)
上海市文化局・南京江蘇省曲芸家協会における中国伝統人形劇の調査	
佐野 賢治、木下 宏揚、中村 政則	ドイツ ベルリン他・オーストリア ウィーン他 (8月31日～9月12日)
ウィーン民俗学博物館・ヨーロッパ文化博物館他で現地の博物館事情、シニアキュレーター養成制度についての情報交換および民俗・民具資料調査	
川田 順造、芦澤 玖美、楠本 彩乃	中国 内モンゴル自治区呼和浩特市・北京 (9月4日～13日)
内モンゴル智力引進外語専修学院、中国科学院遺伝与发育生物学研究所における、蒙古族特有の身体技法、体の柔軟性、体形の関連などについての調査	
八久保 厚志、浜田 弘明	韓国 ソウル・ウルサン・プサン (9月5日～12日)
韓国多島海地域の景観調査	

主な研究活動

現地調査

(2004年8月中旬～11月実施分)

北原 糸子	岐阜県岐阜市 (9月8日～9日)
岐阜地方気象台にて濃尾地震に関する写真資料の収集	
三鬼 清一郎	愛知県名古屋市 (9月9日～12日)
名古屋大学図書館、名古屋市立鶴舞図書館、愛知県図書館などにおける文献資料の調査研究	
香月 洋一郎	東京都中央区 (9月13日～14日)
築地魚市場、おさかな資料館における海に関する環境データの収集	
増野 恵子	山梨県甲府市 (9月16日)
山梨県立美術館における明治期ルポタージュ絵画に関する調査	
君 康道	北海道札幌市・豊頃町 (9月18日～23日)
北海道大学、旧豊頃町立二宮小学校(現二宮報徳館)における絵引き作成に関する資料の収集	
香月 洋一郎	東京都青梅市 (9月21日)
青梅市役所における地割資料閲覧および景観分析データ収集	
君 康道	愛媛県松山市・広島県宮島町 (9月26日～28日)
愛媛県立歴史民俗資料館と宮島町立歴史民俗資料館における「一遍聖絵」に関する資料収集	
佐野 賢治、青木 俊也、金 貞我、中村 ひろ子	韓国 ソウル (10月2日～8日)
2004ソウル世界博物館大会(ICOM)「博物館と無形文化遺産」、およびICOM総会への参加と各国博物館の情報収集	
廣田 律子	中国 湖南省 (10月2日～8日)
新寧県における竹王節調査	
北原 糸子、富澤 達三	静岡県下田市 (10月5日～6日)
了仙寺宝物館所蔵の石版画資料調査	
福田 アジオ、金 貞我、佐々木 睦、田上 繁、彭 偉文	中国 上海・江蘇省蘇州市 (10月8日～12日)
東アジア生活絵引き作成計画にもとづく現地確認調査	
中村 政則、網野 暁	福島県南会津郡 (11月8日～10日)
只見町教育委員会所蔵の民具カードの撮影と古老へのインタビュー	
川田 順造	フランス パリ・エピナル (11月24日～12月8日)
社会科学高等研究院EHESS、民衆版画博物館などで画像資料の収集と農村での身体技法の調査	
香月 洋一郎	山口県大島郡久賀町・岡山県笠岡市 (11月29日～12月5日)
瀬戸内の島の集落の景観データの収集	



海外研究機関との提携

神奈川大学21世紀COEプログラムでは、学術情報の交換と若手研究者の育成を目的として、海外の研究機関と提携を結んだ。また、交流・提携事業の一層の促進のため、情報の交換、資料の交換、研究者の交流、調査研究協力、を主な項目とする覚書を締結した。現時点では以下の7研究機関と提携を結び、さらにこの提携先を拡大していく予定である。

提携機関 (2004年11月末現在)

中国	北京師範大学民俗学と文化人類学研究所 浙江大学日本文化研究所 華東師範大学中国民俗保護開発研究センター	韓国	延世大学中央博物館
香港	香港大学日本研究学系	ブラジル	サンパウロ大学日本文化研究所
		カナダ	プリティッシュコロンビア大学アジア学科

来訪者

下記の諸氏が本学を来訪し、今後の相互交流・提携事業の促進について改めて確認した。

氏名	所属研究機関	訪問日
許南麟 教授	プリティッシュコロンビア大学アジア学科	2004.9.29
王勇 教授	浙江大学日本文化研究所	2004.10.6
劉鉄梁 教授	北京師範大学民俗学と文化人類学研究所	2004.11.5
陳勤建 教授	華東師範大学中国民俗保護開発研究センター	2004.11.5

派遣・招聘

本プログラムより派遣・招聘される若手研究者は、約2週間、それぞれの研究課題にそった現地調査を実施する。今年度は下記のとおり、派遣研究員は1名、訪問研究員は5名となった。

派遣研究員			
氏名	派遣先	派遣期間	専攻/現地での研究課題
藤永豪 (COE研究員・PD)	北京師範大学民俗学 と文化人類学研究所	2004.11.19 ~ 12.1	人文地理学/ 北京市における景観変化についての調査研究

訪問研究員			
氏名	所属研究機関等	受入れ期間	専攻/日本での研究課題
JIANG JING 江 静	浙江大学日本文化研究所専任講師 浙江大学人文学院中国古代史専攻院生	2004.11.29 ~ 12.12	日中交流史/元との交易による日本への輸入品の実態とその影響の調査研究
HAN TONG CHUN 韓 同 春	北京師範大学民俗学と文化人類学研究所 北京師範大学大学院民俗学専攻院生	2004.12.1 ~ 12.14	民俗学/日本の主要都市郊外における文化的特徴、及び商業民俗の調査
YOON HYUN JIN 尹 賢 鎮	延世大学中央博物館学芸員 高麗大学ビジュアルカルチャー専攻院生	2004.12.6 ~ 12.19	韓国近現代美術史/1900年以降のカルチャーイメージ戦略についての調査
MAO QIAO HUI 毛 巧 暉	華東師範大学中国民俗保護開発研究センター 華東師範大学民俗学専攻院生	2004.12.12 ~ 12.25	日中交流史/日本民俗学における調査の理論と方法の研究
CHAMAS FERNANDO CALROS	サンパウロ大学日本文化研究所 サンパウロ大学日本文化専攻院生	2005.1.28 ~ 2.11	日本文化/平安時代の日本文化、日本美術、仏像についての調査研究

モーションキャプチャーを使っての演技の比較への取り組み 日本と中国

長瀬 一男 (わらび座デジタルアートファクトリー チーフディレクター)
廣田 律子 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授・日本常民文化研究所員)

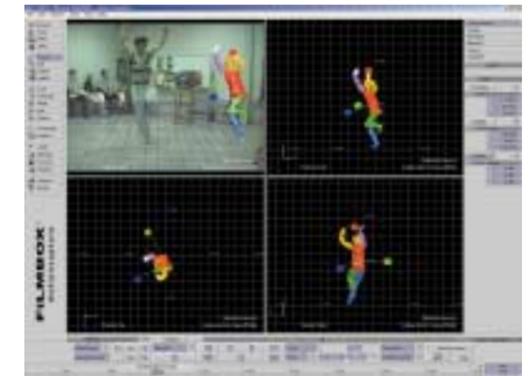
神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」、事業推進担当の廣田教授、COE調査研究協力者の長瀬氏より、本プログラム研究活動の一環として行っている、デジタル資料による身体表現の分析の取り組みの調査報告がなされた。その一部を以下に紹介する。

アジアの種々の芸能において、身体表現が伝達しようとする心情や事柄と動作の間に普遍的に共通するものがあるかどうかを見出す必要がある。その為には客観的なデータを収集することから始めなければならない。そこで、芸能のデジタル記録に早くから取り組み研究成果を蓄積している、わらび座デジタルアートファクトリーの協力を得て、今年6月に中国江西省南豊県石郵村儺舞の全演目をモーションキャプチャー(主にゲームコンテンツやCGアニメーション作成などに使われている技術)で収録した。

収録方法:位置と回転データを計測できるセンサーを演者に
取り付け、実際に演じてもらうことにより、人間の動きをデジタル化する。

今回のデータから様式化の進んでいない芸能と様式化の進んだ型の決まった芸能はまったく異なるものであることがわかった。様式化の進んでいない芸能では見た目には演者の演技は一見同様にみえるが、データからは個人によって違いがあることが分かり、同一人物の演技でも演技するたびに全く別物のようなデータを示す。

これらの収録したデータをさらに展開させ、除災と招福を意図した動きに東アジアの身体表現の共通性が伺えるのではないかと考え、今後分析に取り組んでいきたい。



人体の動き(特に各部位のひねり)を見やすくする工夫がされたCGキャラクター

M.A.RACINET *Le Cotume Historique* ~
(Paris: Librairie de Firmin-Didot, 1888)



アルベール・ラシネ原著『世界服飾文化史図鑑』の原本。19世紀の各国の服飾をカラーで描画しており、服飾・風俗研究の基本図書といえる。

全号のデータベース化。パソコン検索が可能になり、日本・東洋美術研究上での活用が期待される。

『國華』(DVD-ROM版)
(國華社監修、朝日新聞社編・発行、2003年)

貴重資料の紹介

貴重資料の紹介

2003年度に購入した資料

編集後記

博物館の資料・展示に込められ、またそこから発信される問題を特集した。竹内館長の対談・ICOM参加記からも現況の一端がうかがえる。博物館の情報発信機能はやはり大きい。常民研・大学院博物館資料学分野とも連携し、シニア・キュレーター養成のプログラム開発方面の問題などもいづれ取り上げたい。(佐野)

本プログラムがスタートして以来、初めて迎える訪問研究員3名の方々がいっぱいでした。各研究員の方がそろうと中国語や韓国語が飛び交うなど、事務室の中はいつもと違うインターナショナルな空気で活気付きます。今後も研究員の招聘・派遣など、提携先との交流はより活発になっていきますので、これから本誌では各機関の紹介をしていきたいと思えます。(関)